

地獄物語「彼方の世界で知る」

厨の体を、あたしも抱きしめ返した。

「私を、助けてくれて、本当にありがとう」

涙を啜り、少し枯れた声で御厨は何度もそう言った。あたしはその度に背中をさすり、御厨を受け入れた。そして、その御厨のあたたかい体にふと「あの時」が過った。

嗚呼、そうだ。あの時「あの人」に撫でられた感覚はこれと同じだ。そしてあたしはようやく思い出した。

——おばあちゃんの優しさと同じだ。

窓から風が吹き込み、窓際に飾られていた胡蝶蘭が静かに揺れた。

だから杏子が生まれた。……あれは、そう、八つ当たりが一番近いかしら。変わっていく勝俊さん、助けを求める杏子。私がなんとかしないといけないのに、私は何も出来なかった。何も出来ない自分が腹立たしくて、それを杏子に八つ当たりしてしまった……謝って済む問題じゃないけれど、何回でも謝らせて。本当にごめんさい」

昨日のお父さんに続き、お母さんも泣きながらそう謝った。けど、正直もうあたしは謝りたいわけではなかった。謝るくらいなら、次を築いてほしい。

「昨日お父さんにも同じことを言われて、いっぱい謝られた」

ぴかぴかの表紙の漫画を触ると、その表紙に指紋がついた。袖でその跡を拭った。

「もう正直、謝られるのはお腹いっぱいだから、さ」

拭った表紙はやはりぴかぴかで、なんだか読むのが勿体なかった。

「お父さんと一緒に、あたしが許したくなるような家族作ってよ。ね、お母さん」

あたしはあの時「あそこ」であの人にに向けたものと同じ、とびっきりの笑顔をお母さんに向けたのだった。お母さんは

ベッドの上にかかっている机の上には教科書と二冊のノートが広げられていた。ノートのうち、ひとつはとても綺麗に板書が取れており、要所がわかりやすくまとめられている。しかし、もう一つのノートは数字が乱雑に書き込まれており、お世辞にも綺麗とは言い難いものだった。

「——ってことで、ここの答えが出てそれをここに使うの」

あたしは御厨がもはや何を言っているのか全く理解出来ていなかった。もともと勉強が出来るタイプではないあたしにとって、委員長を務めている御厨はハードルが高すぎた。頭を捻らせ、ひたすら唸り声をあげているあたしを御厨は困ったような笑顔で見つめている。

——ああ、もうダメ、わかんない。

とうとう、あたしがペンを置いたのを見た御厨は「ちょっと休憩しようか」と、足元に置いている鞆を探り始めた。そして、御厨が鞆から出してきたのはとても分厚い本だった。休憩でも教科書見るの、と不安に

なっているあたしをよそに御厨はこの分厚い本を開いた。

「これね、幼稚園の卒園アルバムだよ」

表紙をめくりながら御厨はそう言った。

「ほら、ここ」

御厨のその言葉にびくりと肩が跳ね上がった。そんなあたしを余所に、御厨はとある写真を指した。そこには、それぞれ「みくりや しおり」「おの きょうこ」と書かれたスモックを着て仲良く手を繋いでいる二人の女の子の写真があった。それは紛れもなく御厨とあたしだった。御厨からアルバムを受け取りらばらとめくっていくと、そこには御厨とあたしのたくさんの思い出が残されていた。写真の中のアたしはどれも楽しそうに笑って、御厨と仲睦まじく遊んでいる。けれど、やはり今のあたしには残っていない記憶ばかりだった。何も覚えていないあたし。どうしてあたしは忘れてしまったのだろうか。その真実に、アルバムを持つ手が震える。すると、御厨はアルバムを取り、両手で震えるあたしの手を包み込んだ。まっすぐに、透き通って、素直な眼であたしを見つめて離さなかった。

「小野さん、大丈夫。今すぐ思い出さなくてもいい。ううん、例えこれから思い出すことが出来なくてもいい」

御厨の手がぎゅっとあたしの手を握る。先ほどよりも力を込め、真摯にあたしを捉え、震えるあたしを精一杯宥めた。放課後の教室で怖いほどに輝いていたあの日の御厨と同じ顔だった。違うことと言えば、今は怖さなんてものはなく、ただ愛しさがそこにあった。

「あの日、言ったことは本当だよ。小野さん、いや杏子ちゃんともう一度仲良くなりたい。先生からの頼みとかなんかじゃない、これは私の本心そのものだよ」

あたしは、御厨に包まれている手を一度引つ込めた。それを見た御厨はひどく悲しそうな顔をしたが、あたしは再び手を出し今度はあたしが御厨の手を包み込んだ。

「こんなあたしを覚えてくれて、本当にありがとう」

御厨は目を丸くし、やがてその顔には涙が伝った。そして、あたしを優しく抱きしめた。優しい匂いと、あたたかい体。あたしより小柄な御

「俺はな、お母さん……杏子から見ればおばあちゃん一人に育てられてきたんだ」

全部知っているよ、お父さんがどんなにおばあちゃんを大切に、愛していたか。そう言いたいのを我慢し、お父さんの言葉に耳を傾けた。

「一人で俺を育ててくれた婆さんに恩返すために今まで生きていた。でも、その婆さんが亡くなって、俺はなにもわからなくなった。心ここにあらず、ってやつだ。そのせいで会社でも失敗が増えて、どんどんストレスがたまっていっただんだ」

目を伏せ、額に手をあて、苦しそうに言葉をひねり出す。

「そんな時、何も知らずに生きていた杏子が腹立たしくて仕方なかった。お前のために俺は上司からたくさん叱られながらも稼いでいるんだぞ、お前が生きているのは俺のおかげなんだぞ、って……。今考えれば本当馬鹿げた話だ。確かに、俺は婆さんのために生きていた。けど、結婚も出産も、俺自身が決めたことだった。彩子……母さんを好きになって、二人の子供がほしいと願ったから杏子が生まれたのに、……。俺は何もわからない自分の子供に手をあげた最低な父親だ。きつと婆さんも悲しんでいる」

そこまで告白すると、額にあてていた手を振り払い、涙の溜まる顔をあたしに思いつきり下げた。父の涙はあの鏡で見たものと同じものだった。

「許されないのはわかっている。でも、杏子を失いかけて、ようやく杏子の大切さ、愛しさに初めて気づけた。もう俺は家族を失いたくない。だから俺はもう一度やり直したい。これからは三人で本当の家族になりたいんだ」

最後の方はもう涙まじりで濁っていたけれど、お父さんの気持ちはきちんとあたしに伝わった。今度はあたしの番だ。

「……そんなこと言ったら、許さないよ。あたしがどれだけ苦しかったと思ってるの」

あたしの言葉にお父さんはわかりやすいほどに絶望した。顔を青くし、頭は項垂れ目は伏してしまっている。あたしはそんなお父さんを無視し、だからと続けた。

「だから、あたしが許してもいいかなと思えるような家族を作って」

あたしは、そう言い切った。お父さんは先ほどの絶望から一変、信じられないような表情を浮かべた。あたしは焼き菓子一つ取り、お父さんに渡した。

「許すつもりはない。だからあたしが思わず許したくなるような家族にしてよ、お父さん」

お父さん、あたしのその言葉にお父さんは泣き崩れた。そのままあたしから焼き菓子を受け取り、ありがとう本当にありがとうと涙をほとほと落としながらも一口齧った。そして、涙だらけの顔でこう言った。

「甘くておいしいな、二人で食べて正解だ」

お父さんが焼き菓子を持つてきた翌日、今日はお母さんが漫画や小説を持つてきてくれた。そして、またお母さんも思いを打ち明けてくれた。

お母さんはお父さんのおばあちゃんの想いを知りつつ結婚したという。自分がこの人にとって一番でないことは理解していたけれど、おばあちゃんが亡くなりどんどん変わっていくお父さんを複雑な気持ちで見ている。自分では彼を慰めるには力不足だと痛感していたという。

「勝俊さんが杏子に暴力を振るつたなんて最初理解出来なかったの。あの人がそんなことするはずないって、思っていたの。本当は助けないといけないのに、助けてあげられなくてごめんさい。それだけじゃない、私も杏子をストレスの捌け口にしてしまった。本当にごめんさい」

お母さんが持つてきた漫画や小説はどれも表紙がぴかぴかで、一目で新品だとわかった。

「あの言葉」

あたしが一冊の漫画を取りながらそう言うと、お母さんはぴくりと肩を跳ねらせた。

「『あんななんか、生まれてこなければよかったのよ』この言葉は本当なの？」

お母さんはあたしの問いに勢いよく頭を横に振った。

「言い訳に聞こえるかもしれないけど、私も勝俊さんも子供を望んだの。」

終章「境界」

視界は真つ暗だった。何も見えない。けれど、近くでいろんな人の声が聞こえてくる。女の人の声、男の人の声、低い声、高い声、様々な声があたしの耳に入っている。真つ暗な視界とたくさんさんの声、そうだこはどこなのだらう。ボサツ様と真つ暗な道を歩いていたことは覚えていける。けれど、そこからどうなったのか全く記憶がない。気が付けば意識を失い、今に至っている。あたしは、無事に帰ってこれたのだろうか。その時、真つ暗だった視界の奥にとても小さな光が灯った。その光はほとんど膨らんでいき、やがてあたしの視界全部を覆うほどに広がった。そして、その光が突然弾けた。

「……杏子？杏子だ！杏子が目を覚ましたぞ！」

光が弾け飛ぶと、視界は一新し真つ白い天井が映った。そこに、あの人——お父さんの顔が映り込み、あたしの名前を叫んだ。その声につられ、また二人の顔が視界の横から映りこんだ。お母さんと、御厨だった。重い体をゆっくり起こすと、頭がずきりと痛んだ。……そういえば、ここでのあたしは「事故にあつて意識を失っている」ことになっていることを思い出した。ところどころ痛む体を起こしきると、優しく抱きしめられた。

「よかった……、本当によかった……」

抱きしめたのはお母さんで、泣きじゃくりながらあたしがここににいるということを確認するかのようになり、優しくそれでいて力強く抱きしめられた。御厨も両手で顔を覆い、涙を啜る音が鳴る。みんな、ただいま。あたしはどうやら現世に帰ってこれたようだ。

その後、騒ぎに駆けつけた看護師と医師により、今の自分の状態を聞かされた。出血は多かったものの、打ち所がまだよかつたから命に別状はなかつた。しかし、出血の多さから来た意識不明によりなかなか目を覚まさなかつた、とのことだった。あの時の獄卒の男が言っていた通りだった。体中が痛む上、まだ傷が癒えていないのでしばらくは入院しろとも伝えられた。「あそこ」にいた時は傷一つなかつたのに、こちらに戻つてくると怪我だらけとは不思議なものだった。今日はもう遅いというこ

ともあつて、看護師らから三人は帰るよう促されているが、明日からも必ず来ると、三人が揃えて言うものだから笑ってしまった。

一人で過ごす病室は思いのほか広く感じられた。体が痛むのでベッドから動けないが、不思議と退屈ではなかつた。天井に向けて、右手をかざしてみる。握ってみたり、開いてみたり、とにかく痛まない範囲で手をたくさん動かしてみた。あの時、金棒を持った感覚はしつかりと手は覚えていた。拷問に挑戦しようとした目よりも重い金棒を持った、あの感触。金属独特の冷たさと、ざらざらした表面。そして、なによりこびり付いていた血の痕と臭い。この世界にはおそらく存在し得ないものなのに、あたしの手はそれをしつかり記憶していた。金棒だけじゃない。獄卒、熱気、見たこともない不気味な生き物、亡者の叫び声。目を閉じれば鮮明に蘇る「あそこ」の記憶。あたしは本当に地獄にいたのだと、改めて気づいた。心のどこかでこれは夢なのではないかと疑っていた。けれど、あたしの体は覚えている。あれは夢なんかじゃない。この記憶を忘れたくない、あたしはあの時と同じように記憶を思い出し、嘔みしめ、記憶に刻みながら眠りについた。

それからというもの、本当に三人はあたしの病室へ交替でやってきた。お父さんは甘いお菓子を持ってきたり、お母さんは漫画や小説を持ってきてくれた。御厨は勉強道具持ってきて、あたしが授業に置いていかれないようにわかりやすく教えてくれた。国友も時々見舞いに来てくれた。そして、各々があたしにその心の内を伝えた。

持ってきてくれた焼き菓子や口頬張ると、甘い世界が広がった。しつとりとした生地から広がる柑橘の匂い。目を輝かせながら食べるあたしを、お父さんは苦い顔で見つめていた。

「すまなかつた」

もう一つ食べようと箱に伸ばした手がぴたりと止まった。そのまま手をひっこめ、あたしも決意を固めお父さんの方を向いた。今までに見たこともないばつこの悪そうな顔だった。

「今まで、本当にすまなかつた。謝って許されることではないのは承知だ。それでも、話を聞いてほしい」

あたしは静かに頷いた。

地獄物語「彼方の世界で知る」

持っている」

初めて、案内人があたしの目線に合わせて喋った。最初会った時は腰が抜ける程怖く感じていた包帯だらけの顔なのに、今はとても優しいように見える。高い身長で屈み、あたしに目線を合わせる姿がなんだか面白くて、少し笑ってしまった。すると、包帯越しに眉間が寄った。目は見えなくても、この男にだつてきちんと感情はあるんだ。そう告げると、私をなんだと思っていたんだ、と顔を小突かれた。

「私は、八大地獄最下層阿鼻地獄を統べる獄卒。……キョウコが音を上げた等活地獄とは比べ物にならないほどの拷問を担う鬼」

音を上げたとは失礼な言い方だなと顔を顰めていると、だから、と続いた。続くと思っていなかったあたしは、立ち上がりながら続ける案内人を見上げた。直立のこの男はやはり大きかった。

「だから、この私の言葉を信じろ。ちゃんと現世に帰れる。そんな顔をするな」

そんな顔、とはどんな顔だろうか。わかっていないあたしを案内人は見るなり、溜息を吐いた。そして、また小突いてきた。しかも、今度はさつきより痛かった。痛む額をさすっていると、案内人は腕を組みながら小さく言った。

「悲しそうな顔、不安そうな顔はキョウコには似合わない。子供のだから馬鹿みたいに笑っている」

ぶつきらぼうだし、なかなか失礼なことも交じっているけれど、その言葉は不思議とあたしを元気づけた。笑わなくなったのはいつからだろう、最後に笑ったのはいつだろう。上手く笑えるかな、不細工って言われなかな。ううん、そんなことはどうだっていい。あたしは、顔を上げ案内人に精一杯の笑顔に向けた。ありがとう、そんな言葉を込めた笑顔は案内人にきちんと伝わったろうか。多分、きっと伝わったはずだ。案内人は唇を斜めにあげ、優しい声色で言葉を紡いだ。

「そうだ、キョウコはそれでいい」

そして、その強張った大きい手であたしの頭に触れた。こんなごつごつした手に撫でられたことなんて今までに一度もないはずなのに、何故かとても懐かしく感じた。この感覚をあたしは知っている。けれど、こ

れがどこで感じたものなのかが思い出せない。懐かしくも、優しいこの気持ちのいい感覚。一体どこであたしは知ったのだ。わからない。知りたいのに答えは見つからなかった。その時、ボサツ様が準備から戻ってきた。いつも通り錫杖を持ち、もう片方の手をあたしに向けた。

「さて、行くかのう」

あたしはボサツ様の手を取ろうとした。案内人のあの手のぬくもりは気になるけれど、今は一度置いておこう。目が覚めたらもう一度、考えよう。嗚呼、でも、もう会うことはないんだ。最後にこんなもやもやした気分させるなんて、やはり案内人は失礼だ。でも、そんな案内人にあたしは救われた。生きる自信が少しだけ身についた。本当の地獄を覚えてくれた。たった少しの時間しかいなかったけれど、あたしはここできつといういろいろなことに気付かされた。自分のこと、お父さんのこと、これからのこと。いろいろなことに気付かせてくれた。

あたしは、ボサツ様の手を取らずに後ろに振り返った。閻魔様と案内人、あたしに着物を着せてくれた獄卒の人、あたしをここまでつれてきてくれた獄卒の人たち、そしてボサツ様。あたしはここで出会った人を目指し浮かべ、あたしは笑顔で述べる。

「お世話になりました」

礼をし、にっこりと笑うあたし。表情は見えないけれど、案内人は口元が緩んでいるからきつと笑っているに違いない。閻魔様は厳ついその顔を少しだけ緩め、けれど威厳を持った声であたしに言った。

「次はきちんと亡者として出会おう」

その言葉を心に強く刻み、あたしは今度こそボサツ様の手を取った。ボサツ様にもお礼を言うと、何も言わずにただ笑顔で返された。案内人はここでのことは忘れろと言っていたけれど、あたしは忘れたくない。もちろん、人に言うつもりではない。ここでの記憶はきつと、あたしにとつてかけがえのないものだ。ここで起きたことを忘れないよう、ひとつひとつ思い出し、噛みしめ、記憶に刻み、あたしはボサツ様と真つ暗な転生の道を進んでいった。

い」

あたしに難しいことはわからない。でも、一つだけわかったことがある、あたしは、愛されていたかったんだ。瞳から零れた涙は地面に落ち、染みになった。怒り、恨み、会いたい、許し、様々な感情が頭の中を駆け巡る。そして、それらは一つに収着する、帰りたいという気持ちに。けれど、あたしが帰りたいと願ったところで事態はなにも変わりはない。あたしは、地獄にいたのだ。つくづく自分は身勝手な人間だ。地獄に落ちたい、獄卒のなりたいたいと願っていたはずなのに、今は帰りたいと願っている。この鏡が映しだしているものが本当に正しいことであるという保証なんてどこにもないのに、あたしは帰りたいと思いい涙を流している。あたしは、どこで生きるべきなのだろうか。

「本当に、帰りたいと願っているのか？」

その時、あの朗らかな声が響いた。振り返ると、いつからいたのだろうかボサツ様はいた。ボサツ様は錫杖をつきながらこちらへ歩き、あたしの顔をじっと見つめた。顔を縦に振ると、ボサツ様は顔をしかめた。

「娘よ、つい先ほどまで主のことを調べていた。虐待を受けていたみたいじゃのう。それも体に傷痕が残る程の。おなごに傷をつけるのは如何なものか。浄玻璃鏡で現世の今を見たのじゃろう？安心せい、この鏡が映しだすものは全て真実じゃ。だが娘よ、信じられるのか。映像は偽りではないが、娘にとってこの男は十分信頼出来る者なのか？」

ボサツ様はそう優しい声色で言った。まるで、あたしの心を覗いたのではないかと思うほどに、あたしの今の心中を曝け出された。けれど同時に、ボサツ様の話を聞いて決心がついた。

「帰りたいです。でも、あの人……お父さんは正直まだ憎んでいます。けど、それでいいの。この鏡に映っていることが正しいなら、もう大丈夫」

あたしはここで、お父さんの暴力よりも遥かに怖いものをたくさん見てきた。だから大丈夫、というわけではないが、きつと大丈夫だという自信があった。鏡に映っていたあたしに涙を流すお父さんの顔は、おばあちゃんを亡くした時と同じ顔だった。あんなに愛していたおばあちゃんの時と同じ表情を、眠っているとは言えあたしに向けてくれた。お父さんのことはよくわからないけれど、お父さんがおばあちゃんを想う気

持ちは本物だ。あたしはそれを知っている。もう一度、帰りたいですと強く言い切ったあたしをボサツ様は動じず見ていた。けれど、突然その固い表情を崩し、につこりと笑い、「そうかのう」とほほ笑んだ。

「私は、幼くして命を落とした子供を転生させる役割を担っているのじゃが、その力を応用すれば娘、お主を現世へつれていくことも可能かもしれぬ。のう、閻魔よ？」

必ず成功するとは限らんがのう、とボサツ様は付け足した。そんな方法があったならば、どうして最初から教えてくれなかったのだろうか。明らかに、あたしは異端扱いされていたはずなのに。邪魔になるから早く返せばよかったのではないだろうか。そんなあたしの心の疑問に答えるべく、閻魔様が渋々口を開けた。

「……なんせ娘が生身の人間であつたからな。菩薩殿も言っていたが、必ず帰れるわけではないからこの方法は避けていた。それにくわえ、娘、貴様は一言たりとも『帰りたい』と言わなかったからな。娘よ、どうする」
どうする、そんなの答えは一つしかない。こぼれ落ちる涙を袖で拭い、勢いよく頭をさげた。

「ボサツ様、お願いします。あたしをつれていってください」

誰かに対してこんなに頭を下げたのは初めてだったかもしれない。綺麗に直角に折れたあたしの、ボサツ様は「確かに、了承した」と神々しく告げた。そして、転生の準備があるらしくボサツ様は一度退室された。お願いします、そうは言ったものの、一抹の不安が残る。必ず成功するとは限らんがのう——、ボサツ様が言っていた言葉が小さくひっかかる、もしも、帰ることが出来なかったらあたしはどこへ行ってどんな存在になるのだろうか。不安はどんどん広がっていき、拭ったはずの涙がまた溢れてきそうだった。

そんな時だった。涙を堪えるあたしの目の前に包帯だらけの顔が映った。

「もし、無事に戻れたらここでのことは忘れる。誰にも話すな。大丈夫、貴様は必ず現世に帰れる。そして、ちゃんと愛されている。貴様……いや、キョウコは人間だ、地獄ではなく現世で生きる者だ。もう迷うな。キョウコは地獄に落ちるべき悪い子ではない。きちんと現世で生きる資格を

地獄物語「彼方の世界で知る」

意味なんてあるわけがない、そう思いながらあたしは映像を見た。

鏡に映る男は決して裕福そうではなかった。家の中には男と男の母である女性しか見当たらない。その女性はどこかおぼあちゃんに似ていた。男は学校に通いながら働き、家でも率先して女性の助けをしていた。どんな年を取っていく女性の代わりに掃除や洗濯を行い、献身的に支えていた。就職したのか、男はスーツで出かけることが多くなった。けれど、男は変わらずに女性を支え続けた。朝早く起きて二人分の朝ごはんを作り、帰ってからも持てる時間で女性を支えていた。そしてしばらくすると、男が一人の女性をつれてきた。お母さんに似ていた。やがて男はその女性と結婚し、子供を授かった。そのことを告げにいくと、女性はとても優しい笑顔で男を抱きしめていた。男もとても笑っていた。女性と住んでいた家を出てからも男は手紙を送っていた。会社のこと、妻のこと、子供のこと、色んなことが書かれているその手紙を読む女性はとても幸せそうな顔をしていた。ある時、男が妻と子供をつれて実家に遊びにきた。その子供はあたしに似ていた。子供と話をしている女性を、男はとても愛おしい顔で眺めていた。妻と肩を並べて一緒に台所に立つ女性を。男はとても優しい顔で眺めていた。

だが、女性は突然亡くなった。男は泣き崩れ、ひどく落ち込んでいた。そして、仕事での失敗が増えていった。上司に怒られ、頭を下げているシーンが何度も流れた。妻が慰めようとすが、男が元気になることはなかった。そして、また上司に怒られたその晩、帰宅し駆け寄ってきた子供について男は手をあげた。妻は泣きながらに子供を抱きしめ、ひたすらに謝っていた。男の母を想う姿に惹かれたのだ、母を失った悲しみは妻では埋めることが出来ない。それから男はたびたび子供に手を振るっていくことが増えていった。

映像はそこで切れた。あまりの事実にあたしは空いた口が塞がらなかった。あの人が母子家庭だったなんて初めて知った。今のあの人からは想像も出来ないほど、あの人は母を大切にしていた。あたしに暴力を振るっていたのは、愛してやまない母を失い自分という形が崩れ始めた、行き場のない感情によるものだった。しかし、とても複雑だ。あたしは、あの人にとってなんだっただろう、ただの捌け口としか見えない。信

じられないその複雑な真実に目を背け俯くと、案内人がゆっくりとあたしに声をかけてきた。

「……どんな理由であれ、この男がキョウコに暴力を振るっていたのは紛れもない事実。キョウコ、貴様はこれをどう受け取る」

そんなの、あたしが知りたいよ。女手一つで自分を育ててくれた母を大切にしていたお父さんの気持ちは痛いほどに伝わった。けれど、それを理由にあたしを捌け口にされるのはまた別だ。あたしは捌け口にされるために生まれてきたのだろうか。真実を知ったことで、あたしの頭はもうめちゃくちゃだ。あたしはいつだってどうすればいいのだろうか。

その時だった。切れたはずの映像が再び鏡に映りだした。これは閻魔様も案内人も予想外だったようで、とても驚いている。鏡に映ったのは、先ほどまで流れていた男の物語ではなく、病室だった。その病室には女の子——あたしが眠っていた。そして、その周りに三人が囲み皆涙の跡があった。

『もう家族を失うのは嫌なんだ……、都合がいいのは百も承知だ、頼む、助かってくれ……。一緒に暮らせなくてもいい、……頼む』

『ごめんさい、ごめんさい……でも、お願い、もう一度会わせて……。母として会えなくてもいい、……ただ一目でも会いたいのに』

『……あの時みたいに、まださよならも言っていないのに、お願い……消えないで。やっとな、……やっとな仲良くなれたのに』

各々が涙ながら眠っているあたしに向けていた。三人の声は掠れ、今にも途切れてしまいうので、涙と共に流れてしまいう程弱々しい。それは、泡沫のように消えそうな声。散々あたしに暴力を振るっていたが、このザマだなんて。なんだか笑えちゃう。許したわけじゃない、傷だらけになったんだ、許すわけがない。けれど、なにかが吹っ切れたような感覚だ。怒りも恨みも消えていない。でも少しだけ体が軽くなった。

「……父を憎んでいるのは本当。獄卒になって父を苦しめたのも本当。けど、今は色々な気持ちも混じってる。でも、あの人に言いたいことがいっぱい出来た。ううん、あの人だけじゃない、お母さんにも御厨にも言いたいことがいっぱいある。……帰って、起き上がってそれを伝えた

えるものではないと知っていながら、その現場を見せたのは間違いだっただろうか。いつもより手を抜きぬるいものにしたが、それでもこの娘は耐えることが出来なかった。その程度、なのだ。キョウコはまだまだ子供だ。子供は親の元で育つべきだ。だが、私の背中で寝息を立てているこの娘はその親の元に帰りたくないのだろう。正直、刑場の中までついてこれたのは意外だった。そこまでのものなのだろう、帰りたくないという意思は。だが、まだ現世に生きている者が地獄にいつまでもいることは出来ない。きつといずれ大きな「ずれ」となる。どうしたものかと、頭を捻っている、キョウコに着物を着せてくれた衆合地獄の女性獄卒がこちらへやってきた。

「閻魔大王にさっきのこと告げてきましたよ。さつそく閻魔庁でやるみたいなので立ち寄ってください、とのことですよ」

「わざわざすみません。今から行く」

「その子ですか？」

女性獄卒が指すのは私の背中で眠っているキョウコ。

「着いたら起こす。おそらく、こいつこそ知らねばならないことだろう」

それもそうですね、と返し女性獄卒は持ち場へと戻っていった。

——あの娘、おそらく虐待を受けている。閻魔大王に親を調べてくれと伝えてくれ

キョウコが頑なに現世を拒むその理由、紐解いていこう。

第六章 「回向」

どのくらい眠っていたのだろう。目を覚ますと真っ黒い着物の背中だった。そうだ、あたしは案内人におぶってもらっていたんだ。もぞりと動いたのが背中越しに伝わったのだろう、案内人が包帯で覆われた顔をこちらに向けた。

「大丈夫か」

「……うん」

正直顔を合わせたくなかった。あんなに大丈夫、平気と言いつつ

に実際は金棒を振り下ろすことすら出来なかった。見ることも出来ず、口先だけだった自分が恥ずかしい。だが、案内人はその話をする事なく、別の言葉をあたしに告げた。

「歩けるなら、降ろす」

「……降ろして」

あんなに震えて動くことが出来なかった体が嘘だったかのよう、あたしの体は自由になっていた。地に足をつけ、ゆっくりと歩き出す。たった少しの間動かなかっただけなのに、随分久しぶりに歩くみたいだった。どうやらあの建物に行くみたいで、あたしは案内人についていく。いつもよりゆっくり歩く案内人に違和感を覚えながらも、口に出すことはせず、そして案内人もまた黙ったままだった。ただ歩く音だけが耳に届く。建物に着き、案内人は閻魔様がいた部屋へ入っていくのであたしもそれについていく。すると、その部屋にはあの鏡がまた置かれていた。

「……娘もつれてきたのか」

「その方がわかりやすいでしょう」

あたしを見るなりその強面を洩らせる閻魔様と、鏡に手をかざす案内人。あたしはいない方がいいのか、と疑問に思うが二人の会話の内容が見えない。立ちぼうけになっていると、閻魔様がこちらに来いとあたしに言った。言われた通りに鏡の前に向かうと、調整の終わったか案内人があたしの隣に聳え立った。この鏡は、さっきはあたしの事故現場を映した。では、今度は何を映すというのか。そして、それをあたしが見る意味はあるのだろうか。あたしの隣に立った案内人が鏡に向けて虚空を指で切ると、鏡は白く発光した。そして、映像が流れる。そこに映ったのは見知らぬ男の姿。誰だろう、と頭を傾けていると案内人が口を開いた。

「これはキョウコ、貴様の父が現在に至るまでの映像だ」

「はあ？」

あまりにも意味がすぐに理解出来なかったため、思っていた言葉がそのまま出てしまった。どうして、今さらあの人の過去なんてものを見なければならぬのだ。そんな胸糞悪いものなんて見たくない。けれど、案内人が見ると促すものだから渋々鏡に目を向けてやる。こんなものに

刺し込まれた。かき混ぜるように金棒を回し、ぐちよぐちよとまた生々しい気色の悪い音が鳴る。剥き出しになった部分にはや頭としての外見を保てておらず、ただただ赤い液体を垂れ流しているだけだった。そこから垣間見えたものは、とても直視出来るものではなく、あたしはすぐさま目を反らした。今までタスケテと繰り返していた亡者はついにその言葉を失い、赤い液体の中へ沈んでしまった。そして、再び浮かび上がってくることもなかった。浮かび上がらない亡者に苛立ったのか、案内人は舌打ちを鳴らした。すると金棒を持っていない手をおもむろに掲げ、呪文のような言葉を呟いた。

「活きよ、活きよ」

案内人がその言葉を放つやいなや、なんと先ほど沈んだ亡者が再び浮かんできたのだった。しかも、先ほど抉られた目玉と頭は元に戻っている。拷問に亡者が耐えられなくて殺してしまったも、あの呪文を呟けば何度でも亡者を蘇らすことが出来る、その徹底された拷問にあたしは言葉を失った。蘇った亡者は、またタスケテと爛れた唇で叫ぶ。その光景は、「地獄絵図」に違いなかった。そう、ここは紛れもない地獄なのだ。「キョウウコ」

再び金棒があたしの手に渡った。お前もやってみろ、と言わんばかりに案内人はあたしを見ている。さつきより全然軽いじゃない、大丈夫、大丈夫。こんなの平気よ。何度心の中で唱えても震えは消えない。今度こそ、と心の中で意気込んでも目を開けられない。意地で目を開くと、真っ赤な液体に浮かぶ亡者。しかし、先ほど案内人により目玉をほじくり返され頭の中を掻き回された亡者の姿が脳裏にしっかりと残っていて、蘇らされた亡者を見ることが出来ず、せっかく開くことの出来た目をまた閉じてしまった。それを引き金に、阿鼻地獄での記憶が鮮明に蘇ってきた。肉を断つ音、焼かれる音、亡者の悲鳴、血の臭い、飛び散った魂、銅の熱気。記憶は鮮やかに形を成し、あたしの体を犯し、這い寄る。そして、限界がきた。阿鼻地獄にいた時から熱気と血生臭さに体は悲鳴をあげていた。それでも獄卒になりたい一心で、必死に我慢していた。だが、案内人による「拷問」をこんなにも近い距離で二度も見ってしまった。音、臭い、姿、全てがあたしに襲いかかってきた。立っっていられないほど

どに気持ち悪さが体中を浸食していき、あたしはその場にうずくまってしまう。案内人は屈み、吐き気を催し目尻に涙を貯めるあたしの背中をさすった。そして、だから言ったのだろ、とあたしに言い聞かせるように呟いた。

「キョウウコ、貴様は確かに地獄に来てしまった。だが、現世で貴様は生きています。まだ生を全うしていない現世の人間だ。刑を科す者でも、刑を科される者でもない。キョウウコがいるべきところは現世しかない。獄卒になりたいなんて安易に言うな。貴様は現世で生きろ」

現世で生きろ、そう言われて浮かびあがるのはあの痛々しい日々。暴力を振るわれる日々になって戻りたくない。けれど、あたしは獄卒になれなかった。いくら亡者が相手とは言え、あたしに呵責することは出来なかった。苦しみや痛みしかない現世でしか生きられない自分、獄卒になれない自分、とにかく自分が悔しくて仕方ない。父に抗う力も、亡者を呵責する力もない自分がどうしようもなく無力で、目尻に貯まっていた涙が頬を伝った。あたしはここにいたいのに、どうして、どうしてあたしは一歩も動くことが出来ないの。どうして嘔吐してしまっているの。立ち上がって、金棒を持って、釜の中にいる亡者をいたぶらなければいけないのに、あたしの体はまるで極寒の中にいるかのように震えている。涙もひっきりなしに流れ落ち、あたしは立ち上がることに出来なくなっていた。そんな動けないあたしを見て案内人はさすっていた手を止め、溜息を小さく吐き、あたしの前に回り両手を肩にかけさせそのままおぶらされた。

「案内人……」

「黙っている、そこで吐くなよ」

誰かにおんぶしてもらうなんて初めてかもしれない。冷たくてぶつきらばうな鬼のくせに、どこか温かい背中。いいや、これはきつと地獄のこの熱さによるものだ。鬼の背中が温かいわけじゃない。泣きじゃくって臆腫とする頭の中でそんなことを考えながら、案内人の揺れる背中の上であたしはゆっくりと瞼を閉じた。

わかってはいたが、やはり無理であったか。十四の小娘に獄卒など担

人間にはそうもいかないだろう。案の定、後ろにいるキョウウコは口を手で覆っている。「やめてもいいのだぞ」と私が声をかけても、キョウウコは頑なに「平気」と拒否し、少し震える足で歩きだした。それから、度々キョウウコは先ほどの地獄とは真逆なこの環境に身を強張らせ立ち止まることがあったが、それでもこの娘は私についてきた。そして、ついに刑場の奥へ足を踏み入れることに達した。後ろを振り返りキョウウコの様子を仰いでみると、恐怖と驚愕でわかりやすいほどに顔を崩していた。まあ、無理もないだろう。何度も何度も鉄火に焼かれる亡者、現世とは異なる姿の気味の悪い地獄の犬に頭を噛み千切られ、逃げようとするものならば槍で目玉を突かれる。今広がっている光景はそういうものだ。いくら先ほど酷なものを見てきたと雖も、所詮はまだ青い子供。現世で生きてきた子供には到底考ええることの出来ない異様な景色だ。そのあまりにも惨い事実には、キョウウコの顔色は青みを帯びていく。

「本来生身の人間が見ていいもの、来ていいところではない。引き返すか？」

出来るものならば、ここで引き返してほしいところだ。いくら拷問を生業としている鬼の私でも、生身の、それも子供にこんなことを教えたわけではない。それでも、この娘は顔を青くしながらも頭を勢いよく横に振るのだった。

「あたしは鬼に、獄卒になりたい。そのために、お願いして、ここまで、来た。絶対に、引き返さない」

恐怖か、緊張か。キョウウコは途切れ途切れになりながらも、自らの意思を述べた。こんな娘など担ぐのは容易いこと。無理やりにでも担いで引き返すことだって可能ではある。だが、阿鼻を越え、ここまでついてきたその精神がどこまで通用するのか、見たくもある。私は釜の横に掛けられている柄の長い金棒を取り、キョウウコに渡した。

「これで、その釜の中にいるものを突き倒せ」

さあ、キョウウコ、貴様がなりたいたいと請う獄卒へあと少しだ。

案内人から渡された金棒は、あたしが知っている金棒よりも持ち手の部分が長く槍のようだった。金棒を受け取ると、思わずがくんと体が前

方に倒れそうになった。この金棒見た目以上に重く、あたしが持つにはぎりぎりだった。そんなあたしを見て、案内人はまた「引き返すか」と言わんばかりに唇が開いたので、すかさず「平気」と投げかけた。大丈夫、あたしは出来る。これくらいなんともない。さっきだって耐えた。自分にそう言い聞かせ、少し震えだしてきた足で台に乗り釜の中を覗いた。蔓延する湯気の中から見えた釜の中身は、真っ赤だった。だが、その真っ赤な液体の中に浮かんでいるものがあつた。それはおそらく人の手足と思われるもので、皮膚の一部が溶け出し、赤色の液体に皮膚の肌色が混じりだしている。それに加え、ところどころに人間の一部分であろう部分が浮かんだり沈んだりしている。その時、液体の中から人の頭が飛び出してきた。そして、アツイ、タスケテ、と何度も叫びながら釜の縁にかけようとした。

「突いて沈めろ」

それを見ていた案内人がそう言った。そのためのそれだ、とあたしは持つ金棒を指差した。息を大きく吸い込み、もう一度釜を目にする。正直、見たくもない光景だがここでひるむわけにはいかない。それに、直接自分の手で下すわけではない。大丈夫、突いた感触なんてすぐに忘れる。今までもこの傷痕の痛みを忘れることで生きてきたんだ、なのに。そう頭で理解していても、体は一層震え、金棒を持ち上げる力が入らない。金棒を持ち上げて、この亡者目当てに振り下ろして、再びこの真っ赤な釜の中に沈ませなければならぬのに、どうしてあたしの体は動いてくれないの。

震えて動けないあたしを見かねた案内人はあたしから金棒を取り上げ、「こうだ」とその金棒を振り下ろした。亡者の目玉を突き、さらに目の奥まで金棒を動かせ抉り出す音を鳴らしていく。テレビでやっているような安いホラー映画のよりも遥かに生々しく、あまりの気持ち悪さに耳を塞いでしまった。今までアツイ、タスケテと讒言のように叫んでいた亡者は目を抉られてもお叫び続けている。目玉から金棒を一旦離すと、案内人は亡者の頭部目掛け勢いよく金棒を振り払った。すると頭の上の部分が剥き出しになり、そこから血——赤い液体が流れ落ち、釜を満たしていく。そして案内人はその剥き出しになった頭部に金棒を

地獄物語「彼方の世界で知る」

釘は真つ赤な液体まみれ。まさか、あれは。ここへ来る前見せられた液体の銅が過る。液体の銅もあのように真つ赤だった。少し色が違うように見えるが、おそらくあれも銅のような金属を溶かしたものに違いないはずだ。その液体をどうするのか。もう亡者はほろほろだ。魂を引き抜かれ、その魂を釘刺しにされ、挙句その釘で臍を中心に身を貫かれたというのに、まだやるというのか。怖く、泣きたいはずなのに、声も涙も不思議と出ない。それほどまでに、あたしの体は恐怖に支配されてしまっている。案内人は亡者の頸を掴み上へ向けた。そして、真つ赤な釘を喉元目がけて、ねじり込ませた。さらに獄卒は開いている隙間に寸胴をあて、直接真つ赤な液体を流し込んだのだ。黒い煙をあげ、喉を通るその液体が内側から体を焼く音はあたしまで聞こえる。豚肉や鶏肉を焼いているかのような音が、あの亡者の体からする。案内人は舌なめずり、亡者が焼かれるその音が止んだ時、喉から引き抜いた釘で亡者の首を刎ねた。その首は空を舞い、あたしの目の前に転がり落ちてきた。真つ赤な液体を流し込まれ爛れた口元、頬に付いている白と赤。生気のない眼と目が合ってしまった。その気持ち悪さと不気味さに思わず悲鳴をあげる。案内人が髪を掴み後ろへ生首を投げ飛ばした。

「どうだった」

視線を合わせることなく、案内人は見下ろしてそう言っていた。どうだった？なんて、そんなもの言葉で返せるほどの気力はあたしに残っていない。ただ首を横に振ったあたしなんて目もくれずに案内人は勝手に喋る。

「無彼岸常受苦惱処。私が担っている地獄はどうだ」

なんとということか。ここはこの男のテリトリーだった。

「どうだ、獄卒になる気失せただろう」

その言葉であたしは目を覚ました。そうか、あたしは獄卒になりたいと言ったのだった。だから、こんなものを見ることになったのだった。こみ上げてく吐き気を意地で堪え、覚束ない足で立ち上がるうとする。案内人が手を差し伸べてきたが、あたしはその手を振り払った。

「……平気」

「先ほどまで腰を抜き、目を反らし、挙句悲鳴をあげたというのに、

平気と言うか」

全部見透かされていた。けど、そんなのどうでもいい。なんとか立ち上がったあたしは、案内人を見上げきつと睨みつけた。確かに、ここでこの呵責はとも耐えきれぬものではなかった。けど、あたしがそう思ったということは全員が思うこともある。つまり、あの人がだってこんな目に遭えばあたし同じようになるだろう。そして、怯えた表情で助けを請うに違いない。あたしはあの人が憎い。ここで見たこの気持ち悪くも痛々しい拷問、あたしはこれをあの人に味わわせたいのだ。

「正直……怖かった、逃げたかった、泣きたかった」

睨み付け、そう言ったあたしを案内人は満足そうに口元を緩めている。怖くて逃げたくて泣きたかったのは本当のことだ。それは否定しない。けど、あたしは続けた。案内人の緩くなっていた口元がもとに戻った。「けど、……だからこそこの気持ちを味わわせたい。あの人に同じ気持ちをさせたい。あたしは獄卒になる」

そう言い切ったと同時に、あたしの頬に涙が伝った。今まで我慢していたものが決壊したようだった。あたしは涙を拭わず、ただじっと案内人を睨み付けた。涙で滲む視界、案内人がぼやける。そして、案内人が溜息をついた。

「後悔しないと云えるか」

「しない、絶対しない」

再び案内人は溜息をついた。そして歯切れ悪くついてこいと、歩き出したのだった。

後悔しない、とこの小娘は言い切った。あの地獄を見ればキョウコの気持ちは変わると思い込んでいた。しかし、キョウコは自分が味わった恐怖を父親に味わわせたいと言う。まさかこの私が折れることになるとは、とんだ子供だ。本当につれていくべきか悩んだ末、私はこの幼子案内人していた。行先は等活地獄。ここ八大地獄で一番軽い地獄であるが、それはあくまで我々獄卒による考え方だ。生身の人間にはどう見えるかなど考えたこともない。刑場に足を踏み込むと、あたり一面に広がる熱気。そして、蔓延る血の臭い。私には慣れきっているものだが、生身の

濁った白色、どろりとした液体のようなもの。それを全裸の人間の臍から引つ張り出していた。見たこともないそれは、かすかに動きまるで生があるかのような感じだ。目を覆っている指の隙間からその光景を垣間見ていると、案内人が口を開いた。その手には長い鉄の釘を持っていた。「あれは魂そのもの」

「た、……魂？」

なんと、あの物体は魂だと言う。鉄の棒を臍に突き刺し、まるで耳かきでもしているかの如く獄卒は臍の中を掻き回し、ねっとりとした粘着質な音を鳴らす。それは明らかに人間から聞こえていい音ではなく、悍ましい気持ちの悪さがあたしの下腹部からじわじわと襲ってくる。肉を断つ音、皮膚を裂く音。視覚からも聴覚からも襲い掛かってくる拷問。今にも吐き出してしまいそうな口元を両手で覆い隠し、必死に自分という意識を保とうとする。一瞬でも気を抜いてしまうと、胃の中の全てを吐き出してしまいそうだった。

——大丈夫、あたしは耐えられる。

自分にそう強く何度も心の中で繰り返し唱え暗示をかける。ようやく自分を制した時、気づくと隣に案内人はいなかった。辺りを見回すと、魂とその魂の抜けた亡者のすぐ側に案内人はいた。まさか。信じたくない見たくないその光景がちらつき、抑えたはずの吐き気が再びせり上がってくる。

案内人は手に持っている長い鉄の釘をゆっくりと掲げた。魂の抜けた亡者は虚ろな目で案内人を見上げている。そして、一気にその釘を、魂目がけて勢いよく振り下ろした。あたしの目には、その光景はまるで映画のワンシーンみたく全てがコマ送りのように流れていった。速度を持った釘は魂に刺さり、魂は破片を飛び散らせた。びちゃびちゃと空を舞う破片、その一つがあたしの頬をかすめた。そっと頬に手をあてた。ぬちゃり、と気味の悪い音がした。そして、そのまま手のひらを開けおそるおそる目の前へ持ってきた。微かに光沢があり、程よく粘り気のあるそれはゆっくりとあたしの手首を伝っていく。袖口に侵入されそうになった刹那、これはあの亡者の魂であることを思い出した。途端、あたしは血相を変えて腕ごと振り回した。嫌だ、気持ち悪い、嫌だ嫌だ嫌だ

嫌だ、気持ち悪い。必死に腕を振り、息を荒げてもおあたしは動きを止めなかった。吐き気とか、そんな生ぬるいものじゃない。なんと形容していいかわからない程の気持ち悪さがあたしの中で暴れている。ようやく付着していた魂が吹き飛んだ時、あたしは腰が抜け落ちその場に膝を付けていた。荒れる呼吸音の中、案内人はあたしの方をちらりと見た。あげ、笑った。乱れていた呼吸が一瞬びたりと止んだ。あの男は、笑った。魂を突き刺して、ぐちょぐちょにして、辺りに散らしたというのに、あの男は笑っていた。人間の成すことじゃない、こんなことしておきながら笑えるなんてあの男は人間じゃない。そこではつとにする。そうだ、あの男は間違いない、獄卒なのだ。知っていたはずのことなのに、今それをまじまじと見せつけられた。これが獄卒だ、と言わんばかりに案内人は自分の頬に付いた破片を親指で掬い取り、そして舐め取った。

案内人は口角をあげたまま、魂から釘を抜いた。その際にも破片は撒き散る。そして、その釘を亡者に向けた。生気のない亡者の眼に映る案内人の姿はさぞ恐ろしいものだろう。ここで見ているあたしですら恐ろしくて仕方ない。鈍く光るその鉄の釘は、先ほどの魂が付着して不気味な雰囲気醸し出している。案内人は構い構えて、その釘の先を改めて亡者に向けた。何をするのか、とあたしが思うよりも早くに案内人は動いた。何が起きたのか全く見えなかった。気づいた時には、案内人は亡者のお腹……いや、臍を釘で貫いていた。魂の抜かれた亡者に感覚や感情はあるのだろうか、あたしにはわからない。けれど、血は通っていたようで釘に血が伝い流れている。赤黒い血はそのまま地へ落ち、赤の染みとなる。濁った白の魂、赤黒く淀んだ血、両方が地に散った。人間を構成していたその二つは、もはやその機能を失い、惨くもその役目を無理矢理終わらされた。赤と白、本来ならばめでたい色だったはずの二色。案内人は依然として笑みを浮かべ、周りの獄卒も何もおかしいことなんてないとも言っているかのような表情で、寸胴を持ってきている。これが、獄卒にとつてのあたり前なのだろうか。

獄卒が持ってきた寸胴の中には真っ赤ななにか。嫌な予感があった。案内人は魂と血が付着した釘を寸胴の中へ突っ込んだ。寸胴から出てきた

「ここは亡者が落ちるまで二千年かかる。故になかなか呵責することがないのだが、どうやらキョウコ、貴様は運が良いみたいだ」

私の言葉が理解出来なかったのか、頭を傾げるキョウコ。未だ怯えた目をするキョウコを、私は半ば無理矢理に促し、奥へ進んでいった。さあ、この何も知らぬ愚かな娘をどこへつれていこうか。

烏口処を通り過ぎた。口を裂かれた亡者がぐつくつと煮えたる泥の河の中へ突き落されていた。裂けた口から沸騰した泥が流れ込み、口内の粘膜が爛れ、悪臭を放つ。そして体内に侵入した泥は体のあらゆる器官にいき届き、やがて内臓ごとその身を焼き落とす。外からも、中からも襲う、逃れられぬ苦しみ。

黒肚処を通り過ぎた。見るからに痩せ細った亡者。骨と皮しかないその身、潤いがない皮膚。地べたに這いつくばって、土を舐める姿は非常に滑稽。食に食欲なその亡者は、ついに自らの皮膚を目にし、そして口に含んだ。久々の「肉」だったのだろう。皺だらけの口で自らの肉体を貪り始めた。血もろくに出来ない、肉と呼んで良いものかすらわからないその干からびた肉体ははたして美味たるものなのか。自らの肉体を食べちぎる亡者は背後の漆黒の蛇に気づいていない。その蛇は亡者の足の甲にまとわりつき、そしてその鋭く光る牙で食らいついた。しかし、何度蛇は亡者を食らおうとも、亡者の体は再生するのだ。何度も蛇に食われ、その度に蘇る体。肉体が減ぶことなく、繰り返される苦しみ。

苦悩急処を通り過ぎた。亡者はその両の眼に、溶け出された銅を垂らされていた。赤く、黒く、溶けた銅はそのままだ頬を伝い、肩から胸へ、そして臀部へ。みるみるうちに銅に犯されていく体に、熱砂が降り注ぐ。獄卒が金棒でその熱砂を銅で犯されてる眼にすり込む。鉄が焼けるような音をあげ、亡者は言葉すら紡げない。熱砂はさらに体中にすり込まれ、銅と熱砂が混じった皮膚が剥がれ落ち、真皮が顔を出す。そしてそこにも銅は流れ落ち、熱砂は降り注ぐ。おおよそ皮膚と呼ばれるものが全て焼かれ落ちた時、ついにキョウコは腰が抜けその場に脱力してしまった。焦点のあつていない目、震えの止まらぬその身体。キョウコのそれは、拷問を受ける前の亡者と同じだった。どう声をかけようと悩んでいた時、

キョウコの震える唇が薄く開いた。

「負けない……、絶対負けない。私は、……私は負けない」

とても微力な声であったが、キョウコは確かにそう言った。そして、震える体を無理矢理起こし、私の前に立ち上がった。自分は大丈夫だから、まるでそう言わんばかりに強い視線で私を見た。正直、ここで立ちあがったのは意外だった。どうせ帰りたいと弱音を吐くとばかり思っていた。

ならば、尚更その芯を折らなければならぬ。どこへつれていこうか悩んでいたが、行き先は決まった。——無彼岸常受苦惱処。私が担い手を務めるそこへ。

正直なところ、予想以上だった。殴ったり蹴ったり、あたしはそんなレベルを想像していた。所詮中学生が考える拷問なんてそんなレベルなのだ。まさか、人の体に銅や泥が入られるなんて思いもしなかった。そもそも人間の体があんな姿——銅に犯され焼け爛れ、皮膚が剥がれ落ち肉体が真っ赤に染まりあがるなんて一度たりとも考えたことはなかった。あの人に殴られ何度も鬱血の痕を残され、血の味をあたしは知っている。だから、責め苦なんて大したことはないと思っていた。だが、今のあたしは震えが止まらない。ただひたすらに怖い、今すぐに逃げ出したい。けれど今更引き返すことは出来ない。怖さ如きで、消えるほどの憎しみではないのだ。案内人の後ろを黙ってついていく。次はどこへついていくつもりなのか。どこへつれいかれようが、あたしは絶対に負けないんだから。

ついた場所は、鉄で覆われた空間だった。今までの刑場の雰囲気とはどこか異なるこの空間。金属独特の冷たさで覆われている所為か、地獄自身が持つ熱さが遮られているようだった。しかし、血の臭いはどこよりも充満していた。血で充ちた空間、そこに響くのは鬨る音、そしてもう一つとても奇妙な音。それは今までの地獄では聞いたことがなく、あたしの不安を一層強くする。まるでなにかを取り出しているかのような粘着質その音。その音の正体を見た時、あたしは思わず目を覆ってしまった。

第五章 「我執」

獄卒とは、地獄に落ちた亡者に責め苦を味わす鬼たち。閻魔大王に従い、拷問を担う鬼たち。そんなものにこの生身の娘はなりたいたいというのか。

着物の袖口から見える腕や、踝に広がる鬱血や打撲の痕。この娘が暴力を振るわれていることは初めて会った時から気づいていた。それが何によるものなかはわからなかったが、先ほどの問いかけからすると、ほぼ間違いなく親からの虐待だ。となると、獄卒になりたいというのは親に対する復讐心からだろう。そんなもののために、残りの余生を潰してまで獄卒になろうなど、滑稽だ。だが、いつの時代にも虐待というのは存在している。私もそういう被害に遭った亡者を多く見てきた。そして、復讐の気持ちを持つ者も決して少なくないことも私は知っている。

「それは何故だ」

「あつちにいる時、その……虐待されてた。……父から。あたしは、父みたいな人間が嫌いだから」

やはり虐待による復讐心だった。本来ならば、私はこんな小娘の話など聞く必要はない。やめておけ、その一言で済まされねばならない。だが、それはキョウコが亡き者だった場合だ。無論、生身の人間だからと言って許されるわけではない。

「……やめておけ。生身の人間、それもまだ十四の子供が耐えられるものなんかじゃない」

「大丈夫だから、お願いします。……あたしを、獄卒にさせてください！どんなことでもあたしやります、なんでもやります。だから、どうか……」

震える声と足元。キョウコは口をばくばくさせながらも、そう言い放つた。キョウコはこう言うが、きつと刑場を見れば尻尾を巻いて逃げてしまっただろう。齢十四の子供の精神で耐えられるほど地獄の刑場は甘くない。だが、だからこそ刑場を見せるべきなのではないだろうか。あまりにも残酷な刑場を目の当たりにしたことで、現世への欲が出てこないだろうか。否、出るわけがない。だが、獄卒になりたいという欲は小さく

なるだろう。

「……(うんざり)」

獄卒なんてものになりたいというその気持ち、私がへし折ってさしあげましょう。

どこの刑場へつれていこうか悩んだ末、選んだのは己の縄張り、阿鼻地獄。地獄最下層に位置するその地獄は刑場に向かうことすら難しい。亡者はこの地獄へ落ちるまで二千の歳月を要する。等活、黒繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、風の噂ではあるがこの七つの地獄でさえ、ここ阿鼻地獄に比べれば夢のような幸福であるとすら聞く。おそらく、いや確実にこの生身の娘では耐えられない。だが、それでいいのだ。現世で生を全うしていない者が、獄卒になろうなど有り得て良いものではない。ましてや、キョウコはまだ十四の子供だ。現世の人間が地獄に興味を持つのは、獄卒としても喜ばしいことだ。だが、興味の域を逸れてしまうのはいただけない。我々と人間は、別の生き物。人間が我々に干渉することは決して許されない。その違いをその目で焼きつめる、キョウコ。

いくら亡者が落ちるのに二千年もかかるとは言え、獄卒まで刑場に行くまで二千年もかかるのは馬鹿げた話だ。踵を翻し、再び閻魔庁へ戻り地下へ。固く閉ざされているその扉を、懐から出した鍵で開けると、そこにはとても長い通路が延々と伸びている。行くぞ、とキョウコに声をかけ、その長い通路を進んでいく。亡者ほどではないが、やはり最下層。他の地獄の刑場へ行くよりも、遥かに時間がかかる。通路を歩き始め、およそ三十分。ようやく、その通路は終わりを告げた。通路を出ると、そこに広がるのは先ほどよりも生々しい世界。まだ何も始まっていないというのに、ふと後ろを振り返ると青い顔をしたキョウコ。足は震え、呼吸の音が乱れている。

「ここは……」

「阿鼻地獄。八大地獄の最下層。僧侶や仏に粗相を犯した者、現代で言うならば父母殺害や世話になった人、徳や教養が高い者を侮辱した者が落ちる。最も責苦が激しい地獄だ」

そして、私の生業の地。

地獄物語「彼方の世界で知る」

しめられている亡者のものだ。だが、嫌でも入ってくるこの音。せめてものと思い、紛らわすために案内人に声をかけてみる。

「亡者はどんな人たちのことを言うの？」

あたしが返事をしたことが意外だったのであろう。案内人の束ねている髪が大きく揺れた。

「現世で罪を犯した者たちだ」

「罪って例えばどんなこと？」

「盗みや、……強姦と言った淫行、あとは殺害や暴力などだな」

ゴウカンやインコウがいまいちわからなかったが、ある言葉にあたしは過剰に反応した。俯いていた顔をあげると、やはり気持ちの悪い世界が広がっているが今のあたしにはそんなものどうでもよかった。変わらず歩いている目の前の男に言葉を投げかける。

「暴力って？」

「そのままの意味だ。人間相手だけでなく、動物も対象だ」

「……人間に対する虐待も？」

深く息を吸い込み、そしてゆっくり吐き、心拍数があがりながらもそう尋ねた。あたしがそう問いかけると、案内人は今まで歩いていた足を止めた。そして、体をこちらへ向けた。包帯で覆われているその顔は何を考えているか読めなくて苦手だ。案内人はじっとあたしを見つめ、そして躊躇うように口を開いた。

「……そうだ。そういう輩はおそらく、等活地獄の多苦処や極苦処あたりに落ちるだろう」

「そこに落ちたら、この声の人たちみたいになるの？」

「……鉄火に焼かれ、断崖絶壁から突き落とされるからな」

躊躇う案内人とは反対にあたしの気持ちは昂ぶっていた。心臓の鼓動が早まっているのが自分でもわかる。どういっわけか地獄へ来てしまいが早まらないように自分を制するのでいっばいになっていた心に、忘却されていた陰が蘇る。着物の下に隠されている真新しい打撲の痕や内出血が疼き、黒い陰を増長させていく。

嗚呼、そうだ。あたしは「悪い子」。故に、ここへやってきた。そう思っていた。だけど、ここにはあの人のような人間が落ちる地獄があるとい

う。では、ここ地獄の基準ではどちらが悪いのだろう。

「虐待されていた方の人は？」

「さあ？子供ながらに命を落としたりなら賽の河原だろうが、いずれもさっきのよりは軽いだらうな」

ごくろり、と唾を飲み込んだ音がした。あたしは、自分が「悪い子」だと思い込んでいた。少なくとも、あたしが今まで生きていた中ではそう捉えるしかなかった。母に、父に生かされる身なのだから二人の仲を壊した罪を、暴力を受けることで償わなければならないのだ、と。だけど、狭いあたしの世界観なんてちっぽけだ。そんなの、虐待されているという現実を見ないようにするための美化でしかなかった。ここへやってきて初めて気づけた。どんなに美化して自分という存在を繕っても、「虐待されている子ども」という現実が消えないのだ。現実逃避が染み込み、父を憎むと言う、忘れ去られていた感情が形を取り戻してくる。あたしは「悪い子」なんかじゃない。むしろ悪いのはあの人だ。着物の下にある数多の生々しい傷痕。何度も殴られ、蹴られ、時には火傷だったことだってあった。あたしが地獄に落ちるべきなんて考えていたあの頃のあたしとは違う。本当に落ちるべきは、あの人——父だ。出来るものならば、自らの手で父を苦しめたい。……そうだ、どうせ地獄にいるんだ、このまま獄卒になっちゃおう。そうすれば、父のような子供や奥さんに暴力を振るってきた人間を苦しめることが出来る。現世でのあたしはどうなるのかわからないけど、どうせあんな世界で生きていたって救いなんてありはしないんだ。あつちに戻れば、また暴力を振るわれて傷痕が増えていくだけ。そんな世界なんて、あたしは望んでいない。望んでいたものは、温かかったかつての家庭。でも、どうせそれは二度と手に入らない。だったら、ここにいてやる。ここで鬼になって、いずれ来るであろう父をいたぶってやる。

しばらく黙りこんでしまったあたしを案内人は、動じずただじっと見ている。決意が固まったあたしは、震える声で力いっぱい叫んだ。

「あたしを獄卒にしてください」

なんてむかつく言い方だろう。だけど、どうやら着せてもらえるようだ。その女性が多いという地獄へ行こうと先を歩いてきた案内人だが、突然その足を止めた。そして、くるりと翻ってあたしの方を見た。顔色が見えないせいで何を考えているかわからない。

「一つ聞く」

「はい、なんですか」

「キョウコ、貴様年はいくつだ」

「十四だけど……」

年齢なんて聞いてどうするんだ、と疑問に思うあたしとは反対に、案内人は手を顎にあてていた。口元以外が包帯で覆われているため、その表情は見えない。けれど、その雰囲気からなにやら考え込んでいるようだった。

「十四……、直接集合に行くのは憚られるか」

口を薄らと開き、ぼそりと吐いた。独り言だったのだろう、上手く聞こえなかった。

「予定変更する。貴様はここで待っている」

今度ははつきり言った。言うや否や、案内人はさっさとどこかに行ってしまった。こんなところに置いていかれても困る。時折通り過ぎる獄卒らは、ちらちらとこつちを見てくる。何を話しているかはわからないが、どうやらあたしの存在の話はすでに蔓延っているようだ。本当に、噂というものは広まるのは早いものだと思わざるを得ない。

どのくらい経ったのだろうか、ようやく案内人が戻ってきた。その後ろには色鮮やかな着物に身を包んでいる女性がいる。こんなところに置いていかれた文句を言おうとしたが、それすら言わせないうちにただ一言「ついてこい」と言われ、そのままとある一室に連れていかれた。案内人が部屋を出たと同時に、女性は持っていた風呂敷を広げ、入っていた着物を広げた。白の無地の着物と黒の帯だった。「じゃあ、着替えようか」と声をかけられ、あれよあれよと言う間に制服を脱がされ、そしてかわりにこの白い着物を羽織られた。着物は思っていたよりも締め付けられるもので、初めての感覚に戸惑っていると、「今の日本じゃ滅多に着ないものね」と優しい顔でくすくす笑われた。最後に帯を締めて

もらい、あたしは制服から着物へと着替え終わった。そこで、タイミングよく戸をノックする音。大丈夫ですよー、と女性が答えると案内人が入ってきた。そして、着物に着替えたあたし一瞥するなり、「さつきよりかは良いか」と呟いた。

「また着替える時は声かけてね、誰かしら向かうから」

「協力感謝します」

案内人がぺこりと頭を下げたものだから、あたしもつられてお辞儀をする。そうか、これを脱ぐということはまた着ないといけないのか。はたして、あたしはこの着物を何回着ることになるのだろうか。真っ白の着物をじっと眺めていると、「行くぞ」と案内人に言われる。もう一度お札を述べて部屋を出ると、歩き出す案内人の後ろをついていく。着物は思っていた以上に歩きにくかった。

「どこへ行くの？」

今度は行き先をきちんと聞くことにした。さつきみたいにその場に放置なんてもう御免だ。

「一つ空いている部屋があつたはずだ。そこに行く。途中外に出るから気をつけろ」

何故空き部屋に行くのかわからなかったが、一人でここにいってもどうしようもないためついていくが、この男歩くのが速い。しかし、あたしの慣れていない草履のいびつな音を聞いてか、案内人は少しだけペースを落としてくれた。

案内人が先ほど言った通り、しばらく歩くと学校の渡り廊下のような空間に出た。今まで建物内にいたため、あの景色を見ることはなかった。しかし、今視界に移るそれらはやはりあたしには到底馴染めないものばかり。黒い空、むき出しの地面、飛び交う未知の生き物。そして、どこからか聞こえる人の叫び声。それらを受け入れることが出来ずに、俯いていると、目の前を歩く案内人は「亡者の声に耳を傾ける必要はない」と振り返らずに言った。それがどういう意味か理解出来なかった。しかし、案内人は続ける。

「受けて当然の仕打ちをされている亡者の声など、聞くことない」

そしてようやく理解する。このあちらこちらで聞こえてくる声は、苦

地獄物語「彼方の世界で知る」

ち場へ戻ろうとする中、あたしはおばあちゃんの言葉が頭から離れなかった。

『いいかい、杏子ちゃん。悪いことばかりする悪い子はいつか地獄に落ちちゃうからね』

『お父さんやお母さんのことを聞かない子のことだよ。地獄っていうのはね、そういう子を苦しめるところだよ。火で焼かれたり、針で刺されたり、とにかく怖いところよ。杏子ちゃんはそんなところ行きたくないでしょ？だから良い子でいましょうね？』

あたしはここにいていいのだろうか。あれほど地獄に落ちるべきだと願っていたのに、いざ現場に来てここにもいいと言われたというのに、あたしは今さら恐怖に襲われている。閻魔様らは保護と言っていたけれど、あたしが悪い子だと知ったら炎で焼かれてしまうのではないか。もしかしたら、あの人のようにたくさん殴られるのではないか。自分は地獄に落ちるべきだと思っていたし、死ぬ勇気はなかったけれどその覚悟は確かにあったはずだった。けれど、実際はそんな言葉だけだった。今のあたしに、そんな覚悟は残っていない。そんなあたしを見透かしたかのように、ボサツ様はぼんとあたしの頭を撫でた。

「これから数日は怖いことだらけで、きつと怯えながら生活することになるじゃろう。早く元の世界に戻りたいと願うじゃろう。だがこれだけは信じてほしい。お主はまだ死んでおらん、生身の人間じゃ。鬼でも亡者でもない存在じゃ。地獄の獄卒は誰構わずに拷問をするわけではない。亡者でないお主が拷問にかけられることはない。それは、この地蔵菩薩が保障しよう」

ボサツ様は、宥めるようにあたしにそう言った。撫でている手はとても優しく、まるで大好きだったおばあちゃんに撫でられているようだった。その手つきは心地よくて、そしてどこかあたたくくて、気を張り詰めていないと思わず涙がこぼれそうになる。嗚呼、こんなにあたたかいぬくもりはいつ以来だろうか。そんな、あたしがボサツ様のあたたかさに心満たされていると背後から声がした。

「菩薩殿」

その声は低く、そして少し掠れていた。振り返って声の主を見ようと

したところ、その姿に思わず腰が抜けた。ボサツ様が手を差し伸べて起こしてくれたが、あたしは未だその姿に恐れを抱いている。ここに来てから見た者たち——ボサツ様が言うには獄卒の鬼たちは皆着物を着ていたり、角が生えていたりとおたしが知っている人間とはどこか違っていただけけれど、それでもきちんと顔があって表情もあって、とても人間に似ていた。しかし、今あたしの目の前にいるおそらく獄卒であろう男は、とても人間と似ているとは言えない風貌をしていた。黒い着物に身を包み、顔中包帯で覆われているその男は閻魔様ほどではないが非常に身長が高く、あたしを見下ろしている。その圧迫感から思わずボサツ様の後ろに隠れる。

「この女が生身の人間か」

あまりにもぶつさらばうな言葉にますますの恐れを抱いていると、ボサツ様が今までの経緯を包帯の男に話す。そして話が終わると仕事があるということ、この場を去ってしまった。最後にもう一度あたしの頭を撫で「大丈夫じゃ。心配することはない」と言い残して。

ボサツ様がいなくなつて、包帯の男と二人。沈黙になると思ったが、そうはいかなかった。

「お前が生身の人間である以上、私の名前を教える必要はない。だが、呼ぶ名がないと困るだろうから便宜上『案内人』とでも呼べ」

包帯の男、もとい自らを案内人と呼ぶ男はそう告げた。案内人はさらに続けて「名前を言え、苗字は省け」とも言ってきた。……杏子、とおたしは小さく答えた。

「では、キョウコ。まずはその洋装の衣を着替える。それはここでは、非常に目立つ」

確かに、亡者と呼ばれる者も獄卒も皆着物を着ているなかであたしの恰好は異様だった。だが、あたしは生まれてこのかた着物なんでものを着たことは一度もない。構造も着方もさっぱりだ。しかし、どうやらそれは顔に出ていたようで案内人はその高い位置から嘲笑うかの如く、あたしを鼻で笑った。

「誰も貴様が着られるなんて思っておらん。女性獄卒が多い地獄へ行くぞ」

この空間では視覚・聴覚を遮断したあたしが異質のように見えた。だが、鏡から聞こえた御厨と国友の悲痛なあたしの呼ぶ声に、意識は再び鏡へ向く。

『小野さん！小野さん！しっかりして！』

『——はい、友達が車に轢かれちゃって……血もいっぱい流れてます！お願いです！早く救急車お願いします！』

そこに映されていたのは額から血を流しているあたしと、そのあたしの傍で泣きじゃくっている御厨、混乱しながらも携帯電話で救急車を呼ぶ国友だった。鏡が映すその光景はあまりにも残酷で、あたしは鏡から目が離せなかった。救急車を呼び終えた国友も涙まじりに御厨とともにあたしの名前を一心不乱に叫んでいたが、映像はそこで途切れてしまった。おそらく、この鏡が映し出したものはあたしの意識がなくなつたあとの状態だ。この映像を見たことで周りの男たちは一層ざわつき始める。意識は失っているが打ち所を見るに脈はあるだろう。この娘の話は本当だ、まだ死んでいない生身の人間だ。男の誰かがそう言ったのが聞こえた。

「だが記録に名前がない以上、この娘は現世ではどうなっているんだ？」

また別の男がそう声を荒げた。

「おそらく意識不明の重体扱いだろう……だがしかし」

現世の人間が生きながらにしてここ地獄へ来てしまった。亡者でも獄卒でもないこの娘をどう扱えばいいのか——。久しく悩むこととは無縁だった閻魔様が頭を抱えたと同刻、この部屋の扉が突如開かれた。

「どうした、なにやら騒がしいのう」

赤と黒で染められたこの部屋に似つかわしくない明るい声色。輝かしいオーラを纏ってこの部屋に入ってきたのは、お坊さんのような頭をして、ゆったりとした布を身につけてニコニコした顔の人だった。そう、まるでお地藏さんのような人だった。お地藏さんみたいな人は騒ぎの中心があたしであるとすぐに気付いたようで、持っている錫杖をしゃらんと鳴らしながら近づいてくる。閻魔様のような威圧感がないとは言え、やはり未知なるその雰囲気は怖い。おそらく、怖いという気持ちで顔に出ているのだろう。お地藏さんみたいな人は一旦足を止め、にっこりと

微笑んだ。

「菩薩殿、わざわざこちらまで出向いていただいてありがとうございます」

男の一人がそう言った。

「いえいえ、気にするでない。私も閻魔と久しぶりに話そうかなと思っていたところじゃ。しかし、まさか……生身の人間がここにいるとはもう」

微笑みながら交わされる視線はいささか恐怖があった。だがしかし、その反面このボサツ様という人にはどこか落ち着きやわらかい優しさがあのように感じた。

「この娘は現世ではまだ生きているのだろうか？」

閻魔様が静かに頭を縦に振った。

「ならば、閻魔よ。この娘を保護するしかないじゃろ」

ボサツ様がそう発した瞬間、周りの空気が一変した。これまで大人しかった周りの者たちが、その顔を曇らせながら口々に声を上げる。

「菩薩殿、しかし……」

「生身の人間が地獄にいるなんて前代未聞です」

「そうですよ！そもそも生身の人間がいて良い場所とは思えません！」
自分のことであるが、あまりにも実感がなくて他人事のように見ていると、おそらく裁判で使うであろう笏で閻魔様が場を制した。ぱしん、という乾いた音が響く。

「……僕も、そうするしかないと考えていたところだ」

相変わらずにっこりとするボサツ様、そして啞然とする周りの男たち。あたしのことを話し合っているはずなのに、当のあたしはよくわからないままである。ただ、ここ地獄で保護されることになったというこのことは理解した。

「しかし、一体誰が面倒を……？閻魔様も菩薩殿もお忙しいですし」

「その件だが、阿鼻のやつを連れてこい」

閻魔様が近くの者に小さな声で伝えた。どうやらあたしの待遇は決まったようだ。あたしはここ地獄にいることとなり、その面倒をアビ？という人がしてくれるらしい。周りの者たちも話がまとまったと見て持

た。

「娘よ、ここがどこかわかっているか？」

「……わからない」

あたしがそう答えると、巨漢の男はさらに顔を強張らせた。正直、出来るものならば振り返って全力で逃げ出したいほどに怖い顔だった。だが、あたしの周りには男らに囲まれて逃げ道はない。

「ここは、八大地獄だ。現世……娘がいた世界でも地獄という文化は伝わっているはずだ」

地獄というフレーズに体がびくと跳ねたのを、巨漢の男が見抜き損なうわけがなかった。あたしが地獄に反応を示したことで、巨漢の男は話を続けた。

「どうやら地獄は知っているようだな。地獄には死んだ人間、すなわち亡者を裁く裁判所が十ある。ここがその裁判所の五番目だ。そして、儂がここの主——閻魔だ」

その名前に、思わずはっと息を飲み込んだ。あの時見た木の像には隣にもう一つの像があった。地獄を行き来したというオノノタカムラのインパクトがあたしにとって大きすぎて見落としていたけれど、閻魔像と確かに表記されあのお堂の中に祀られていた。そして、目の前にあの像と同じ名前、閻魔と名乗る男がいる。つまり、ここは地獄なのかもしれない。いや、真正銘地獄だ。ここに来るまで見てきたものは到底あたしの世界では考えられないものばかりだった。そんな世界を、あたしは知らない。巨漢の男改め、閻魔様と周りの男らは依然としてあたしを奇怪な目で見つめる。彼らの話ばてんで理解出来ないが、どうやらあたしは死んだわけではないようだ。「死亡記録がありません」ってそういうことだと思う。でもここは地獄だという。遠足に行って、車に轢かれたあたしはどうなったのだろうか。そんなあたしの心を読んだのか、閻魔様はあたしに再び問いかけた。

「娘よ、どこまで覚えてる？」

どこまで？それはきつと、あたしにここに現れるまでのことだろうか。遠足、京都、車……あたしはまだ落ち着かない頭から記憶を絞り出す。

「……中学校の遠足で京都に来た。そこでお寺に行って、そのあと友達

……うん、知り合いが車に轢かれそうになったから、……その子を突き飛ばして代わりにあたしが轢かれた。そこからはわからない」

最後に頭を横に振ったあたしを、閻魔様や周りの男らは何とも言えない表情で見ている。憐れみや同情、そして疑い。様々な目が混じる沢山の視線は決して快いものではないし、あたしを受け入れているとも思えなかった。だが、閻魔様はその視線を振り払うかのようにとても長い溜息を吐いた。それはあたしだけじゃなく、おそらく閻魔様に仕えているであろう周りの者らも眉をあげ少し驚いた顔をした。

「鏡を持ってこい」

閻魔様は一番近くの者にそう命令した。鏡が何なのかあたしにはさっぱりわからない。こんな目に遭うことになるなら、もっと地獄について知っておけばよかったなど、ふと思ったがそんな余裕どこにもなかったことを思い出して、案外自分が地獄へやって来てしまったのは妥当ではないのかと思う。なんせ、地獄へ落ちることを願っていた程だ。

持って来た鏡は、あたしが想像していたものよりずっと大きいものだった。あたしの身長をゆうに超える高さを持つ鏡は、とても綺麗に磨かれていて汚れひとつない。一人の男がその鏡に手を翳すと、白く発光し鏡にながが映し出された。本来、鏡はその前にあるものを左右反対に映し出すものであるはずだが、この鏡は特殊な仕様らしくその理屈とは違っているようだ。閻魔様が「おおよそでいい、時間軸を照合させろ」と男に告げる。その命を受け男が翳している手を小さく揺らすと、鏡が次々と場面を切り替えて映し出す。そこだ、と閻魔様が呟いた。鏡に映し出されていたものは、なんとあたしだった。六道珍皇寺を出ようとしているあたしと御厨、国友がその鏡に映し出されていた。その信じた光景に釘付けにされていると、本来ならばこういった使い方はしないのだが今回は例外だ、と閻魔様が小さく息を吐きながらぼやく。

「次のポイントなんだけど——」

鏡の中の御厨の音が聞こえた。そしてその声をまもなくして、耳を塞ぎたくなるような音が響いた。あたしが轢かれた瞬間だった。思わず目をぎゅつと閉じ、耳も塞いだあたしとは正反対に男ら含む閻魔様は微動させず、どうってこともないかのように鏡を見つめていた。まるで、

そう思っていた。視界が完全に戻り、目を見開いた先に見えていたものは病院特有の白い天井——なんてものは欠片もなかった。その光景は、とても信じがたいものであたしは何度も瞬きをした。

「この娘どう見ても現世の人間だよな」

「ああ、しかもこれ多分生身だぜ」

「マジかよ！あ、起きたみたいだぜ」

「お、本当だ。おーい、大丈夫か」

その光景は、黒く淀んだ空を背景に、着物を着ているが人間にはあるはずのない角を生やした男にあたしは囲まれ覗きこまれていた。思わず大声を出して飛び上がり、尻餅をつきながら男たちから距離を離す。幸いなことに、男らはなにやら話しこんでいるようであたしに着眼はなかった。このまま逃げようとしたが、辺りを見回した時あまりにも現実離れしている風景に思考が止まってしまった。そこから燃え盛っている炎に、黒い空を飛んでいる見たこともない鳥、そして時折聞こえる悲鳴のような叫び声。ここは、どこなの？あたしやっぱ死んじゃったの？混乱するあたしを余所に男らは話こんでいるが、どうやら話がまとまったらしくあたしの側へやってきた。逃げなければ、と思っではいるのにあまりにも信じられないことばかりで声も体も固まってしまっている。二人の男がそれぞれ両腕を持ってあたしの体を起こした。残った男の一人があたしに告げた。

「すごく怯えた顔してる……生身の人間だから当然か。ごめんね、少しついてきてね」

と、言い終わると両脇の男が歩き始めたのであたしも否応なしに歩かされた。

あたしはどこへ連れていかれるのだろうか。そしてここはどこなのだろうか。あたしは一体どうなったのだろうか。疑問が募るばかりのあたしは、これからどうなってしまうのか。

第四章 「無明」

「ほう、生身の人間の娘とな」

目の前の男がそう言った。男はあたしの倍はあるであろう身長からあたしを見下ろす。また余裕もよく、すさまじい存在感を放っている。その威圧感に慄き、後ずさつてしまうとまた別の男とぶつかった。中央に座っている巨漢の男のように大きい体ではないものの、やはり着物を着て髪の間からは角が見える。その様子に怯えた声を出してしまうと、この男は尻を少し下げた。どうやら繊細な性格をしているのかもしれないが、あたしにとつてその風貌そのものが畏怖の対象なのだ。

目を覚ましたあたしは、角を生えた男らに両手を掴まれながらここへ連れてこられた。コンクリートで整備された道なんてものはなく、剥き出しで荒れている砂利道をひたすら歩かされた。時折聞こえていた悲鳴のような叫び声は、虐げられている男が発しているものだった。あたしを連行している男の一人が言った。「もう少した」と。そう言われ視線を前方に向けると、確かになにやら黒と赤を基調としている建物があった。あたしが今までいた世界にあれば必ず浮くような外装をしているが、この恐ろしい世界ではひどく馴染んでいる。内装も外装に違わず、黒と赤が中心となっていた。よくわからないオーナメントが壁に飾られており、電気はなく蝋燭の炎が建物内を照らしている。目に入るもの全てが馴染みのないことばかりで、一層恐怖心を煽ってくる。ようやく一番奥の部屋にたどり着いた時、巨漢の男が視界に写り思わず二度見をした。そして冒頭に戻る。

「やはり何度見ても死亡記録がありません」

「俱生神の存在も確認出来ません」

どうやら、あたしはここではかなり違和感のある存在であるようである。先ほどから巨漢の男の周りの者たちはせわしなく動いている。「ぐしようしん」とやらはわからないが、死亡記録という言葉に体は反応した。あたしは死んだわけじゃないのか？じゃあここはどこなの？あたしの夢？目が覚めてからあたしの頭はずっと混乱している。そんな混乱しているあたしを余所に、巨漢の男は紅色の顔を洩らせてあたしに問いかけ

地獄物語「彼方の世界で知る」

な甘味処、坂道……今まであたしが生きてきた中で見るものが少なかつたもの。それらに目が奪われる。あたしは今、未知なるところにいるのだ。柄にもないと知っているが、わくわくしている気持ちが昂ぶり、心は高鳴る。

探索ポイントの一つにしていた六道珍皇寺に着いた時、国友がぼつりと零した。

「ここって、地獄に繋がっているっていう逸話があるよねー」

その言葉にあたしはぴくりと耳が反応した。——地獄。遠足という、慣れていないことに夢中になっていたせいで、頭の中から姿を消していた単語がぶくぶくと浮かび上がってくる。そうだ、あたしは悪い子だ。今回の遠足だってそうだ、素直に御厨を受け入れたらいいものを、あたしは何度も断った。断っていい権利なんてあたしは持ち合わせていないのに。結局のところ、あたしは御厨によってもたらされた束の間の「普通の生活」に酔っていたのだ。突然俯いたあたしを心配してか国友が大丈夫？と劳いの言葉をかける。大丈夫、と答えたものの、本当はその劳いの言葉さえあたしがもらってもいいものなんかじゃないのに。

境内はひどく静かで、風の音とあたしたちが鳴らす音以外なものもなかった。敷地内はそれほど広くないのであつという間に回ってしまった。オノノタカムラという人の木の像を見た時、この人は地獄とこの世界を行き来したのかと思うと、なにかよくわからない気持ちで心が埋まっていた。地獄は本当に恐ろしいところだったのだろうか、あたしみたいな子だらけだったのだろうか。陰がかかる心の中で様々な疑問が生まれる中、最後にお堂の小窓から見える井戸を見ることになった。国友と御厨が先に覗き、最後にあたしの順。少し背伸びをし、小窓から見えた景色は特になにも特徴のないありふれた庭みだつたのに、あたしの瞳には今日見えてきたどの景色よりも色鮮やかに映り、おもわず息をするのも忘れてしまった。一番奥に見える小さな古井戸。あれが、オノノタカムラが地獄へ行くための道になった井戸。木の像を見た時と同じ、なんだかよくわからない気持ちが再び込み上げてきた。これは一体何なのか。井戸も見ることが出来たので次のポイントへ向かうことになる。御厨がマップを見ながら次のポイントへの道を調べていた時だった。ここへ

来る時あまり車に遭遇しなかったので、あたしたちはつい油断してマップを見ながらの移動に心を許していた。だが、今一歩先で御厨がマップを見ながら歩いている左横の先に一つの黒い影——車が速度を持ってこちらへ向かっている。御厨は後ろを振り返り、国友と次のポイントについて話している。国友は影に気付いていない、あたししかこの状況に気付いていなかった。あたしがする義理なんてない、とか。悪い子なのだからこれぐらいしないと、とか。親友の国友はなんできづかないの、とか。頭の中ではいろいろなことがよぎった。それこそ、御厨と過ごした学校での記憶とか今この状況に明らかに不必要な記憶もまるで走馬灯のように駆け巡る。なんて不吉なんだ。でも、体は頭が考えていることなんて気にもせず、ただ走り出していた。無我夢中に走って、間に合えと体がそう叫んでいた。御厨の肩に触れたと同時に、影はすぐそこまで迫っていた。国友もようやく気付いたが、もうなにかも遅かった。あたしはめいっばいの力で御厨を突き飛ばした。その時だけは、見えているもの全てがスローモーションだった。国友の叫び声とか、御厨の馬鹿みだいに驚いている顔とか、いろいろなものがあつたけれどあたしはそれらを受け取ることなく、耳をつんざく轟音とぶつかった。

国友の助けを呼ぶ声、御厨の泣きながら小野杏子を呼ぶ声は決して杏子に届くことはなかった。

ここはどこだろう。そもそもあたしなにしてたんだっけ？ああ、思い出した。遠足に行ってたんだ。柄にもなくうきうきしてしまつたんだよな、あたし。あれ、じゃあここどこだ？真つ暗でなにも見えない。なんであたしこんなことにいるんだ。……そうだ、御厨をかばつて車に轢かれたんだ。じゃあ、あたし死んだのか？いや、でもこれ死んでるようにはみえないぞ。動かすことは出来ないが手足の感覚だつてあるし、今こうして頭の中で考えることだつて出来ている。じゃあここは病院なのか。……きつと、なんで死ななかつたのよとか言われるんだろうな。本当、これで死ねたらよかつたのに。

ここまで頭の中でしゃべっていた時、真つ暗だつた視界がうつすらと光が入ってきた。きつと意識が戻つたのだ。この光の先は病院の天井、

何故御厨とこんな会話をしなければいけないのか分からなかったが、その幼稚園はあたしも通っていたものだった。突然理由もなく嫌な汗が額を伝った。どくんどくんと心は高鳴る。まさか、いや、でも、そんなはずは。頭の中を埋め尽くすのは分かりやすい動揺の言葉たち。

「小野さん、私そこで『杏子』って子と仲良くしてたんだ。……ねえ、小野さん私のこと」

「知らない！やめて！あたしは、御厨なんて人知らない！あんたとはこの学校で知り合った！あたしの中にあんたはいない！」

御厨の言葉を遮って、あたしは声を荒げた。あたしと御厨はこの中学校で出会った。それ以前に出会ったことはない。だが、あたしの肝心の幼稚園の記憶は抜け落ちている。おそらく暴力による弊害で、よりにもよって一番家族らしい家族であっただろう幸せな幼稚園の頃の記憶が失われている。

「……大きい声出して悪い。でも、あたし幼稚園の時のことなにも覚えてないから御厨さんのことも覚えてないし、正直……信じられないし」

「そっか……なら仕方ないか。私の方こそ変な話をしてごめんね」

この話はお互い忘れよう、御厨のその提案によってこの会話は終わることが出来たが、ただでさえ心地よいとは到底言えなかった雰囲気が一層重く、苦しいものになってしまった。あたしはもう耐えきれなくなつて帰ろうと鞆に手をかけた時、御厨がその手を握った。

「……だつたら、もう一度友達になろう」

夕日の眩しさではない。それは紛れもなく御厨による輝き。素直で、透き通って、まっすぐで、そんな眼があたしを捕えた。逸らすことの出来ないその力強い眼差しにあたしは抗うことは出来ず、ただただ圧倒されるばかりだった。言葉をうまく発することのできないあたしを、御厨は優しく微笑み包み込む。あたしはそんな雰囲気、優しすぎる御厨が怖くなって逃げるように教室から出て家までダッシュした。その日の夜は寝ることが出来なかった。

翌日、学校に行くと御厨は昨日のことなんてなかったかのように、あのやわらかい表情であたしの周りにいる。もちろん、国友もだ。昨日、あの御厨の表情を忘れることが出来なかったどころか、今なお脳裏に焼

き付いている。忘れられないあの眼、表情。そして、一つの陰。あたしは本当にかつて御厨と親しい間柄だったのか。それはわからない。だが、不思議なことにこれらの気持ちや昨日の出来事は決して心地悪いものではなかった。むしろ、信じがたいが遠足に行ってもいいと思っただけの自分。暴力を振るわれ心も体もぼろぼろな自分。母に突き放された自分。地獄に落ちるべき自分。様々な思いを胸に、その日はついにやってきた。

第三章―後章「逆流」

バスに揺られている間に、どうやら窓の景色は一変していた。駐車場にバスが停まり、降りてみるとここはいつもの町より空気がおいしいよな気がした。もちろんあたしの勝手な思い込みだが。みなな反応を見ている限りそうでもなさそうである。そうここは京都。あたしは、遠足に来たのだ。未だ、少し後悔はしているが来てしまったのだからもう戻しむ他ない。いつもと違う景色にきよるきよるしていると、隣にいた御厨に覗きこまれた。

「小野さんもそういう顔出来るんだ。あつ、そつぽ向かないですよ」

御厨はあの日からずつと変わらずこの態度だ。それがいいのか悪いのかあたしにはわからないが、気まずくなるよりかはマシなのだけはおかっている。

一通り歩いたあと、八坂神社を起点に自由行動が始まった。各々が班に分かれ、班長があらかじめ用意していたマップを片手に散り散りになつていく。もちろん、あたしらの班長は御厨だ。御厨はリュックからマップを出し、辺りを確認するとあたしの腕を引っ張り「さあ、小野さん出発だよ！」と、相変わらずのまっすぐの笑顔をあたしに向けた。あたしは御厨に流されるがまま、八坂神社の朱の鳥居を潜り抜けた。

そもそも、あたしは学校と自宅以外の道をほとんど歩いたことがないのだ。だから、今日見るものすべて本当に新鮮だった。古い建物や様々

地獄物語「彼方の世界で知る」

上靴を脱ぎ、下靴に履き替えた時思わず盛大な溜息が出ってしまった。今日は非常に疲れる一日だった。御厨の勢いに流されて遠足に行くと言ってしまったが、あたしの中に実際に遠足に行くというビジョンは全くなかった。御厨も国友もああ言ってきたが、どうせ言葉だけだ。きっと、班行動になったらあたし放置して二人でどこか行くに決まっている。あたしは絶対遠足には行くもんか。御厨は今日やたらとスキンシップを取ってきたが、それもどうせ今日限りだ。明日になれば今まで通り、あたしなんか話しかけてくる人は誰もいない生活に戻る。少し普通の子みたいになれたからといって、浮かれて辛い目に遭うのはあたし自身なんだ。ただでさえ、お母さんのあの言葉でひどく辟易しているというのに。辛い思いするぐらいなら一人でいい。あたしはそうやって生きてきたし、これからもそうやって生きていくつもりだ。

帰宅して、机の上に置かれているお金をポケットに入れ再び家を出る。お母さんとはあれから一切話をしていない。適当にスーパーのお惣菜コーナーでお弁当を選び、ついでにお茶も買った。夕方学校から帰ると机にお金が置かれるようになった。それは、夕飯は自分で買いにいけというこたらしく、あたしはどうやら唯一与えられていた食事すらも奪われてしまいかねないところまでできてしまったようだ。家に再度帰り、買った弁当をレンジにかけて一人ぼっちで夕飯を食す。全く悲しいと思ってもいないはずなのに不思議と左頬に生ぬるいものが伝う。どうして、こんなことになってしまったのだろう、と嘆きながら食べるスーパーの惣菜はひどくまずかった。

翌日、きつとまた一人ぼっちの生活と思いきいでいたあたしの頭はキャバオーバーを起こしていた。教室に入るとあたしの席には御厨と国友が何故か既に待ち構えていた。自分の席が間違っていないかもう一度見たが、やはり二人がいるところがあたしの席だった。二人はあたしを見つめるや否や声をかけてきて、また手招きもする。……どうやらいじめられているわけではなさそうだ。だがしかし、彼女らの奇行はこれだけではなかった。移動教室の際もあたしの周りに現れ、いつも一人で菓子パンを食べる弁当の時間もついてきた。いつもぼうっとしてただ窓の

外を眺めているだけの昼休みも、席の近くに居座り二人で喋り時折あたしに話を振ってくる。それは楽しいものなのかと疑っていると、まるで心を見透かされてしまったかのように御厨が「私小野さんと喋れて楽しいよ」と笑顔で小さく零した。それを受けて戸惑うあたしをくすくす笑う国友。もうわけがわからなかった。ただひたすら御厨を中心にあたしにかまってくる。あたしには御厨の真意が読めない。こういった日々は今日で終わると思いきやそういうわけでもなく、翌日も翌々日も続くこととなった。その間に、バスの座席や自由行動でのルートなど遠足にまつわる様々なことを決める時間があつたが、いずれも御厨があたしを引つ張り、参加させられた。まるで外堀を埋められて遠足に行かざるを得ないようにされていることに嫌気が差し、ついその不機嫌さが顔に出た。そして「私張り切りすぎちゃったね、ごめん」と。あたしどうせ行かないのに、と言いたい唇をぐっと堪えて飲み込む。ここで言ってしまったえば昨日の二の舞だ。

「ねえ、小野さん。私ね、本当に楽しみな。勇気出して小野さんに声かけて、ほぼ無理矢理にだけ一緒に班になれて、この三人で行けるのが本当に楽しみなんだ」

御厨はあまりにも素直すぎると思う。あたしとは真逆だ。虐待を受けていることを盾に捻くれた性格を受け入れさせている自分にとつて、御厨のまっすぐな眼はひどく痛いものだ。人間ここまでまっすぐな眼が出るものだと気付かされる。

今日はどうやら天気が良いみたいで、放課後の教室に綺麗な夕日が射し込む。窓際に腰をかけていた御厨はくると背を向け、窓の外——グラウンドを見つめながらゆっくりと唇を開いた。

「小野さんはきつと興味なくて覚えてないだろうけど、……私ね、小学生の時引つ越してきたの」

へえ、そうなんだ。と決して口には出さずに心の中で相槌を打つ。あたしは相変わらずぼうっとして、天井を仰いでいるだけ。

「でも生まれはここだよ。幼稚園もこの幼稚園に通っていたよ。第三幼稚園って言うんだけど……小野さん知ってる？」

くないの。その気持ち少しは考えろよ」

別に猫を被っていたわけではないが、だんだん汚くなる言葉。こういう言葉を使ってしまうあたり、あたしはやはりあの人の娘なのだと思ってしまう。あたしの言葉に対して再び前へ出ようとする女子を御厨が制して、御厨が一步出る。

「椿ありがとう。でもさがつてほしいんだ。小野さんは、自分で誘わなきゃ意味がない」

「栞ちゃん……」

茶番なら余所でやってくれ。これ以上ここにいっても埒があかない。ここにいたら遠足に来てよと何度も何度も言われてしまう。だったら、逃げるように後味は悪いが教室から出てしまおう。適当な理由をつけて教室から離れようと、椅子を引いて立ち上がるうとした時「待って！」と御厨に腕を掴まれた。

「小野さん行こう！行きたくないっていう小野さんの気持ちはすごく伝わってきた。でも、行こうよ、絶対後悔させない絶対笑顔にさせてみせる！絶対楽しいものに私がする！だから私と一緒に京都に行こう。うん、私と京都遠足に行ってください」

もう折れるしかなかった。御厨はこのクラスの委員長だ、御厨を敵に回せばおそらくクラス全員が敵になるだろう。家にいるのが心地悪くなってしまう以上、学校に来なければならぬ。家よりマシな学校を今以上に悪化させるわけにはいかなかった。それに、当日休んでしまえばいいのだと今更気づいた。どうせ、本音はあたしなんか来てほしくないのだから、当日休めばあたしも御厨たちも万々歳だ。それが一番平和的だ。

「……わかったよ」

そう呟いたものの、あたしの頭は当日休むことではいっばいだった。そんなあたしの傍らで、御厨と椿という女子はこれからどうするかと話していた。あたしのこと誘った割に二人で決めようとしている。ほらね、やっぱりあたしなんか目にもくれない。委員長って大変だな。形だけとは言え問題児を誘わなきゃ駄目なんだから。とんだくだらない茶番につき合わされたものと、呆れを含んだ溜息をつくと同時に御厨がずいっ

と顔を近づけ「小野さんはどこに行きたい？」と聞いてきた。

「え……？えっと、どこでもいい……」

予想外すぎる御厨の行動に、先ほどまでのきつい言葉はどこへいつてしまったのかと自分でも思ってしまう程動揺してしまった。御厨らは相変わらずあれこれ話しているが、依然として御厨はあたしの傍から離れない。どうしたものかと考えていると、チャイムが鳴り響いた。ホームルームが終了したという合図であると同時に、放課後の清掃の始まりを告げるものでもある。あたしは今週掃除当番でないのでさっさと帰ろうと思うのだが、御厨がひつついているからそうもいかない。早く帰りたいあたしは、御厨を引つ剥がそうとしようとしたと同時に椿という女子が御厨を軽く引つ張った。

「栞ちゃん私たち掃除当番だよ。早く行こう？それに小野さん困ってるよ……？」

「そうだったね。引っ付いて小野さんごめんね。椿はどこだっけ？」

「私は数学準備室。栞ちゃんは？」

「私は美術室。途中まで一緒に行こう」

「うん」

御厨が離れて、ようやく帰れるあたし。鞆を抱え、掃除当番だという御厨らの横を通り過ぎようとした刹那、御厨があたしの名前を呼んだ。帰ろうとするあたしは振り返らずに、立ち止まって耳だけ傾ける。

「小野さん、私のわがままを受け入れてくれてありがとう。さっきも言ったけど、絶対楽しいものにするから。本当にありがとう。じゃあ、また明日ね！」

それだけ言い残して二人は長い廊下の先へ姿を消した、と思っただが一つの影がこちらへ戻ってきた。あたしにはもう関係ないことだろうと思っただけ、靴箱の方角へ足を向けた時またしてもあたしの名前が呼ばれた。今度は御厨とは違う声だった。

「小野さん、私国友椿。遠足私も一緒にの班だから、その……よろしくね」国友椿、と名乗る女子はそうあたしに言った。国友はそれと、続けたが「ううん、なんでもない」と歯切れの悪い言葉を残して数学準備室の方へ行ってしまった。

地獄物語「彼方の世界で知る」

その影があたしを呼んだ。少しだけ視線をずらして確認すると、少し長いポニーテールを靡かしながらあたしを見る女子がいた。確かこのクラス委員長をやっていることは覚えていたが名前は思い出せない。なんか難しい名前だったはず。そしてこの女子の後ろにももう一人女子がいることも確認した。ポニーテールの女子はあたしが無視に近い形を取っているにも関わらず、構わず話しかけてくる。

「小野さん、私御厨葉だよ。覚えているかな？」

あたしは小さく頭を横に振った。

「あはは……、そうだよね」

御厨というらしいポニーテールの女子はそう苦笑いを作る。クラスに全く興味を持たないあたしがクラスメイトの名前を覚えているわけがなかった。もちろん後ろの女子の名前もわからない。あたしが名前を覚えていなかったにも関わらず御厨は尚も話しかけてくる。

「ねえ、小野さんよかったら私たちと班組まない？」

私たち、ということは後ろの女子も一緒なのか。だけどそんな気遣いがない。そもそもあたしは遠足に行かないのだから。おそらく委員長を務めているから担任にあれこれ言われたのだろう。浮いている小野を誘えども言われたのだろうな、かわいそうに。あたしは先ほどと同じように頭を横に振ると、御厨はわかりやすく顔を曇らせた。

「小野さん去年もいなかったじゃん。今年は行こうよ！」

「……悪いけど、行きたくないの」

そりゃそうだ、クラスの連中は揃いも揃ってあたしのことを気味悪がる。なんでわざわざそんな人らと一日拘束されなきゃダメなのか。いつもの学校生活ならまだしも、遠足のように皆がどこかいつもと違う特別な気持ちになるような空間はあたしにとって毒でしかない。というか、御厨と去年も同じクラスだったことを今知った。

「先生に何か言われてあたしに声かけたんだらうけど、あたし別に平気だから」

そう口早にあたしは告げる。後ろの女子はずっと眉を擡めている。

こんな言い方したのだから流石に折れたらだろうと思っただけけれど、委員長さんはどうやらあたしが想像していた以上に頑強のようだった。

「先生に言われたからじゃない、私自身の意思で声をかけたんだよ。小野さん一年の時からずっと暗い顔しているし、誰とも一緒にいない。みんなはそれを気味悪いって言うけど、私はそうは思わない。だって……」

だって、のあととはよく聞こえなかった。しかし意図して濁したようだった。

「……そういうの、余計なお世話って言うんだよ。お節介しいなら別の子にして」

もうお願いだからあたしに話しかけるのはやめて。あたしなんか誘ったってなにもいいことなんてない。むしろ誘えば後悔するに決まっている。そしてお母さんみたいに言うんだ、あんたなんかいなければよかったの、って。そんなの、もう嫌だ。

「……あはは、そうだよね。私って本当……お節介だよね」

きつとこれであたしから離れると思っていた。だけど御厨という女はあたしがかこまで言っても引こうとは微塵もしない。御厨はおそろしく強かった。

「でもね、小野さんのことが心配なのは本当なんだよ。ずっとずっと、声をかけたかった。でも、私って臆病だからなかなか一歩が踏み出せなかった。……もう一度言うね。ねえ、小野さん私たちと遠足へ行こう？」

御厨がどんなに言おうとも、あたしも自分の気持ちを変えるつもりはなかった。遠足には行かない、それは揺るぐことのないものだ。だが、ここでずっと黙っていた御厨の後ろにいた女子が前へ出てきたことで事態は変化する。

「あ……、葉ちゃんの気持ちも少しは考えてあげてください！」

名前を知らぬこの女子は声を震わせてそう告げた。これは御厨も予想外だったようで少し驚いた表情をする。

御厨の気持ちを考えて、なんて言われてもあたしには何もわからない。そもそも人の気持ちがそう簡単にわかるものなら、あたしは今別の道を進んでいるはずだ。

「御厨さんの気持ちを考えて、って言うなら、そっちこそあたしの気持ち考えてよ。あんたらがどれだけ誘おうが、あたしは遠足なんか行きた

「普通」の子でもない。つまり、あたしは多分「悪い子」。おばあちゃんが言っていたことを思い出す。悪い子は火で焼かれたり針で刺されたりする、と。布団を被っているはずの体が無意識に震える。涙はずつと静かに流れている。

あたしは、「悪い子」。地獄に落ちて、火に焼かれ針に刺され、徹底的に苦しまなければならない存在。お母さんが言った、「あんたなんか、生まれてこれればよかったのよ」というのはどうやらあながち間違いではなかったようだ。だって、あたしが生まれて来なければお母さんとお父さんは仲良く暮らすことが出来ていたはずだ。先ほどまであれほどあった父を憎む心は、気づけば自分の不必要さを嘆く心が変わっており、母の言葉を受け入れたくない心は、自分を「悪い子」だと思い込む心に変わっていた。

あたしは、地獄へ行かねばならない。だが、そうとは言えあたしにはどうするべきかも分からなかった。あたしに死ぬ勇気はない。そして、父に抗う勇気もなかった。自分はここにいるべきでないと感じたものの、あたしにはなにも出来ない。涙は枯れてしまったせいとか、頬に流れてこない。死ぬことも抗うことも出来ない自分に苛立つてくるが、それがあたしなのだと思わされる。物語の子たちならきつと、立ち向かっている。でもあたしにはそんなこと出来ない。立ち向かえないあたしは、ここにいる資格がない。

ここまで考えた時、流石に頭がぼんやりとしてきた。そういえば、なかなか寝れずにいたのだった。明日は学校だ。さっきまで地獄に行かねば云々の思考をしていたのに、明日は学校があるなんて考えてしまう自分に思わず笑ってしまう。

目が覚めたら、地獄に落ちていますようにと、到底叶うはずのない愚かな願いとともに、あたしは意識を手放した。

第三章―前章「報身」

先日、置手紙と一緒に添えた京都遠足のお知らせという紙。それが今

あたしの机に返されている。ご丁寧に必要最低限のものも置いて。

いつもならこういう遠足のような行事は避けていた。あたし自身が行っても楽しめないものもあるが、きつとあたしが行けば他の子たちはあたし以上に楽しめなくなってしまう。だが、今回は違う。遠足を避ければお母さんと二人きりになってしまう。そんなの、今のあたしには耐えられない。だからといって、なかなか遠足に乗り気にもなれない。どうしよう。ふと、紙に目を落とすと、そこには行き先などが載っていた。行き先は京都府京都市東山区と書いてあるが、京都の場所がざりざり分かるレベルのあたしにとっては、東山区がどこなのか全く分からない。建仁寺や八坂神社、六道珍皇寺を回って日本の文化を直接触れてみましよう。続きにそう書かれているが、いまちピンとこなかった。そもそも読み方もわからない。こんなところへ行つたところで楽しめないのはわかりきっているが、それでもこの家にいるよりかは……マシなのかもしれない。頭の中がぐるぐるするなか、あたしが導き出した答えは、「行く」だった。

紙最下部に「班行動を通じてクラスの団結力を高めましょう」と書いてあったが、そこまで目を通していなかったあたしは翌日のホームルームで後悔することとなる。

翌日のホームルーム、あたしは案の定後悔していた。てっきり遠足は全員で動くものと思い込んでいたが、どうやら後半は班行動の時間があるようでこのホームルームがその班決めの日間だという。ふざけるな、と心の中でこぼす。これならお母さんと二人きりの方がマシかもしれない。やはり、遠足なんてものにあたしが行くのはそもそも間違っているんだ。そうと決まれば、あたしはただひたすら窓の外を眺める。こういう時、後ろかつ窓際の席でよかったなと心底思う。ゆつくりと流れる雲、たまに聞こえる飛行機の音、そういう音は教室に溢れる喧嘩からあたしを癒してくれる、はずだった。あたしの前に影が出来た。それが人によるものだとはいくばりに理解出来てはいたけれど、すぐに顔を上げることはしなかった。

「小野さん」

た。お母さんがお父さんを説得して、あたしを優しく受け入れてくれて、一緒においしいご飯を食べる。そうして怯えることなく眠りにつく。こんな生活がやってくると信じて疑っていなかった。けれど、現実はいつだってあたしに優しくない。そんなのは所詮あたしの妄想でしかなかったのだ。

「あんたなんか、生まれてこなければよかったのよ」

頭の中での言葉が幾度なく駆け巡る。あれは夢だったのではないかといい、頬をつねってみたり頭を揺さぶってみたり様々なことを試みたけれど、一向に覚める気配はなく、ただこれが現実なのだと思います。知らされるだけだった。

幸せな家庭というあたしの妄想が散っただけならよかったものの、それどころか唯一の味方（あたしはそう思っていた）を失ってしまった。文字通りの一人ぼっちになってしまったのだ。改めてそう実感すると、寂しくなってしまったのかなんか無性に過去を思い返してしまった。あたしが持つ一番古い記憶は小学生になりたての頃おばあちゃんの家にいった時のだ。あの時はまだ普通の家庭だった。おばあちゃんとお母さんが作ったたくさんの料理をお父さんと一緒に食べて、あたしの運動会のビデオをおばあちゃんに見てもらって、いっぱい褒めてもらった。頭を撫でてくれるおばあちゃんの手が大好きで、何度も何度も撫でてもらいにいっていた。その度におばあちゃんは「仕方ないわねえ」って笑って撫でてくれた。……どうして、この日々は続かなかつたのだろう。これは、今あたしが思い描いていた家庭そのものだ。どうして、と強く思うと同時に生ぬるいなが頬を伝った。どうやら知らない間に泣いていたようだった。

おばあちゃんは遠方に住んでいたこともあって、数えられるくらいにしか会うことはなく、そのままあたしが小学生を卒業する随分前に亡くなってしまった。そして奇しくもお父さんがおかしくなり始めたのもその頃だった。最初の時こそ、痣になっても目に見えないところを狙って殴っていたけれど、今やおかまいなしに至るところに痣や血痕が出来てしまっている。父親を憎んでいるかと聞かれれば、もちろん憎んではいると答えるだろう。ただ、時折この前のように悲しそうな目であたしを

見てくることがある。暴力を振るわれるようになる以前から、お父さんにはなにか秘密を隠しているように見えることがあった。だが、それは分からないままだ。だけど、確かあの時——おばあちゃんの家を訪れた時に一度だけ聞いたことがあった。「おとうさんって、なにか秘密にしているの？」と。その問いかけに父は「杏子はまだまだ悪い子だから教えられないなあ」と笑って答えていた。きつと深い意味は特になかったのだろうけれど、「悪い子」というフレーズは頭の中で引っかかる。そういうえば、おばあちゃんにもよく言われたことがあった。

『いいかい、杏子ちゃん。悪いことばかりする悪い子はいつか地獄に落ちちゃうからね』

『悪いことって？地獄ってどういうところなの？おばあちゃん』

『お父さんやお母さんのことを聞かない子のことだよ。地獄っていうのはね、そういう子を苦しめるところだよ。火で焼かれたり、針で刺されたり、とにかく怖いところよ。杏子ちゃんはそんなこと行きたくないでしょ？だから良い子でいましょうね？』

『うん！』

とても懐かしい会話だった。そして、強く心に刺さった。今のあたしは、はたして「良い子」なのだろうか。子供への躾の言葉を鵜呑みにするのも馬鹿げた話だが、今はとにかくあの言葉を忘れない一心だった。たとえ、子供を躾けるための意味などない言葉だとしても、お母さんの言葉が頭から少しでもなくなるのならそれでいい。だがしかし、軽く考えるだけであつたはずなのにあたしの意思とは関係なくどんどん深いものになってしまふ。

お母さんは、お父さんが変わったのはあたしのせいだと言った。きつとそれは本当のことなのだと思う。あたしが生まれてくる前のことなんて全く知らないけど、おそらく先ほど思い出していた記憶のような生活だったのだろう。だから、きつとあたしのせいなんだ。じゃあ、あたしは「悪い子」なのだろうか？それはあたしには分からなかった。でも、少なからず「良い子」ではないのははっきりと分かる。そしてあたしは

こえるクラブ活動の話や話題のドラマ、ヒットしているアーティストの楽曲、同級生たちが話すことに興味を湧くことはあれども、結局のところそこで終わってしまう。

何事も下手に口出さない方が身のためだ。それは虐待を受けて唯一学んだことだった。

下校して家に戻っても誰もいない、それが当たり前だったはずなのに、今日玄関には女物の靴が並んでいた。いつもなら出かけているはずのお母さんの靴だ。まだ日は暮れてないというのに、あの人はまだいないというのに体がぶるりと震えた。靴を脱ぎ、踊り場を抜け居間へ入るとそこには椅子に腰をかけ、ただじっと虚空を見つめるお母さんの姿があった。テレビも点けず、ひたすら虚ろな目でぼんやりとしているお母さんは、ようやくあたしが帰ってきていることに気が付いたようで、ゆつくりと椅子を引き立ち上がった。そして昨晚と同じようにあたしを見つめる。だが、どこか昨日とは雰囲気は違うように見えた。どこがとかがとかまでは分からないけど、直感でそう見えた。そしてその直感はやはり悪いものだった。

お母さんはふうと息を零したのち、今まで虚ろにしていた目をきつと吊り上らせた。昨晚怒りに任せて感情のまま動いていた姿とはまた別の感情。昨晚のような姿は少ないもののまだ今までも見たことがある、感じたことのあるものであったが、今日の前にいるお母さんは初めて見るものだった。

「昨日ね、あれからいろいろ考えてみたのよ。そしたらね、いろいろ分かったのよ」

一歩ずつ近づいてくるお母さん。いや、違う。これは、お母さんの姿をしたなにかだ。

「勝俊さんがおかしくなったのは、杏子あんたのせいよ」

あの人のように暴力を振るわれているわけでもないのに、体は動かないし口には鉄の味が広がってくる。

——お母さん？何を言っているの？

暴力を振るわれていることに達観していた一方で、心の中ではお母さんが助けてくれるってかすかに信じていた。昨日の夜だって、二階のお

母さんの音が聞こえたからあの人も止まることが出来た。そういったことは過去に何度か起きていた。だから、お父さんに暴力を振るわれても、学校で一人ぼっちでも、お母さんだけはきつとあたしを見てくれている。そう信じていたし、お母さんも同じ気持ちなのだと思切っていた。それなのに。

「あんたが生まれてから勝俊さんはおかしくなった。あんたが生まれる前に戻りたい」

「そ、そんな言いがかりじゃん！」

あたしだって好きで生まれてきたわけじゃないんだよ、と言おうとしたけれど、その言葉は出なかった。気がつけば距離があったはずのあたし達の間は埋められていて、お母さんは目と鼻の先に立っていた。

「あんたなんか、生まれてこなければよかったのよ」

お母さん——目の前の女の人は静かにそう吐き捨てた。

第二章「久遠」

白馬に乗った王子様と結婚するんだ。伝説の剣を手にして魔王を倒すんだ。夢を叶えてこれから歩み続けるんだ。すべて幼い頃に読んだ漫画のお話。世に出ているフィクションはハッピーエンドで締められることが大半だ。現実とは違くと割り切つていても、どうしても物語の人物と自分を照らし合わせてしまう。両親から虐待を受けていた女の子は、自分に好意を抱いている好青年に助けってもらい両親とも和解。これも昔読んだ小説だ。嗚呼、どうしてあたしは物語の中に生まれて来なかったのだろうか。そうすればあたしも、普通の女の子になれたのだろうか。

そこまで考えて、あたしはかぶりを振った。そんなこと考えたって仕方ない。いくら今生きているこの現実が嫌だからといって、受け入れたくないからといって物語の中に生まれたかったと考えるのはくだらないし、なにより愚かだ。だけど、「もしかしたら」や「いつか」なんて来ないと理解していてもどうしても願ってしまう。「もしかしたら」、「いつか」あたしも幸せな家庭で過ごせる。最近まで心の隅でそう思っ

ぼやける視界とふらふらする体に鞭を打ち、体を起こす。口の中が異様に気持ち悪い。そういえば切れて血が出ているのだった。口を漱ぐため台所へ向かおうと壁を手に立つた時、二階から襖を開く音が聞こえた。誰？またあの人？なんで？もう今日は終わりなんじゃないの？と、一気に混乱するあたしを余所に、襖の音は足音に変わり、その音はゆつくりと階段へ近づいてくる。一歩ずつ忍び寄ってくる音。過ぎ去ったはずの恐怖が再びあたしの元に戻ってきた。体が硬直する。そして、階段をゆつくりと下りていた音がびたりと止まった。振り返れば全てわかることなのに、あたしの体はうまく動いてくれない。少し沈黙が訪れる。だが、それはすぐに破られた。

「……杏子」

あの人ではないその声。あたしの体はまるで逆毛立つかのようにぶわつと震える。気持ち悪いままのはずである口内が乾く。震える体無理矢理振り向かせると、そこには階段のほのかなあかりに照らされ佇む、母の姿があった。

「……おかあ、さん」

口の中が切れているためうまく喋ることが出来ない。もとより、動揺してそんなことなんて関係ないけど。

お母さんはあたしの名前を呼んだきり何も喋らずに、ただひたすら暴力を振るわれ、ぼろぼろになったあたしを見つめている。再び沈黙が訪れようとしたが、今度はあたしがそれを壊す。

「どうしたの？」

暴力を振るわれていたことなんてなかったかのように、出来るだけ明るく言ったつもりだった。だけど、母の目は相変わらずあたしだけを見て無言のままだった。あたしの言葉に返事するわけでもなく、かといってあの人のように力任せに接するわけでもなく、ただずっとあたしをその目に写している。

だが、ようやくその唇が薄く開いた。

「……どうして」

「お母さん……」

それは聞き取るのが難しいほどひどく小さい声。

「どうして、……どうして、こんなことになるの！」

先ほどまでの姿からは想像も出来ない大きな声に思わず体が強張る。その言葉は確実に怒りを孕み、そしてその矛先は確実にあたしに向けられていた。ただ黙ってあたしを見つめていた母がまるで偽物だったかのように次々と、怒号が飛んでくる。

「どうして！あの人、勝俊さんはこんなことをする人なんかじゃなかったのに！なんで！私は勝俊さんと幸せな家庭を作りたかっただけなのに！」

言葉とは裏腹に、お母さんの頬には静かに涙が流れている。

そんなの、あたしだってそうだよ。あたしだって、あたしだってみんなと同じ普通の生活を送りたかったのに。お母さんのせいでもないってわかっていても、この場にいると責めかねないと判断したあたしは、お母さんは押しつけて二階へあがっていった。そして自分の部屋に籠り、鍵をかけてベッドに身を放り投げた。口の中は相変わらず気持ち悪かったけど、そんなのどうでもいいと思えるくらいあたしの頭の中はぐちゃぐちゃだった。

その夜、あたしは久々に涙を流しながら眠りについた。願わくは、こんな生活が夢であってほしいと。

やはり、そうそう都合が良いことなんて起きるわけでもなく、結局は夢であるわけもなく、気が付けばカーテンから朝日が射し込んでいる。こうやっていつも通り朝が来ていつも通り朝ごはんを作って食べて、そして別段行きたくない学校へ足を運ぶ。授業なんて適当に聞き流して、弁当の時間は離れて食べて、これでいいのだと自分に言い聞かせながら一人で過ごしている。あたしが所謂「普通」の子だったらあたしみたいな子には近づきたくないだろうし。たまに視線を感じることはある。最初の頃はそれが気味悪くて嫌で仕方なかったけれど、あの人——実の父から暴力を振るわれていくうちに、視線どころじゃなくなり今ではどうでもよくなった。痣や出血痕は日に日に増えていき、見えているわけでもないのに、まるでオーラでも出ているみたいにどんどん人は離れていく。そうやって、学校でも一人で過ごし、下校している日々。たまに聞

暗い中必死に目を凝らしながら用を足し終えてから、はっと気づいた。
——水を流してしまった。

先ほどまであれほど気を張り詰めていた状態だったが、トイレに辿りつけて尿意から解放されてしまい、油断が生じてしまった。その結果、いつもと同じように水を流してしまった。しかもよりによって、小ではなく大で。どうしようと思うと同時に様々な考えが頭の中を過る。あの人が気付いているとは限らない？いいえ、大のレバーで流した音は居間でも聞こえる時がある。でも、今あの人はテレビを見ていたし、そっちに集中していたかもしれない。でも……と、頭の中で一人自問自答を繰り返すが、これだというものはなかなか出てこない。もういつそあの人が寝るまでここに立て籠もろうとも考えた。だが、小野家にトイレは一つしかない。もし、あの人たちが用を足しにきたらおしまいだ。つまり、ここから出て二階の自分の部屋に戻るしか術はないのだ。

……よし、と心のなかで呟く。覚悟は出来た。鍵を外し、ノブを回す。少し開けた隙間から見える視野はトイレに入る前と変わっておらず、左手のガラス戸から居間の光が零れている。だが、一つ違うのはテレビの音がなくなっていた。もしかしたら、もうすぐここを出るのかもしれない、そうなるってしまえば鉢合わせになってしまう。それはまずい。早まる心を落ち着かせ、入った時と同じように静かに扉を開ききった。そこには誰もおらず、静けさだけがあった。いける、と心の中で小さく笑んだ利那、後ろのガラス戸が音を立てて開かれた。そこに立つあの人の表情は逆光でよく見えない。今階段を走って駆け上がれば、部屋まで逃げ切れるし、鍵をかけてしまえば籠れるのに両足はピクリとも動いてくれない。

「杏子」

あの人があたしの名前を声に出した。その瞬間、強い力によって体は突き飛ばされていた。頭がじんじんと痛む中、逃げなきゃと思うが体をうまく動かせない。右手をついて立ち上がろうとした時、今度はお腹にすごい力が乗りかかってきた。馬乗りにされると気付いたのは、乾いた音が鳴って頬が赤く染まりあがった時だった。

「なんなんだ！お前は！俺を避けるみたいになそこそと！ああ？大体、

お前が悪いんだぞ！ガキのくせして親に歯向かうなんざあっていいわけねえだろ！」

まだ赤く染まっている頬に二発目が降り注ぐ。先ほどのよりスピードを増している拳は口内にまで振動を伝え、口の端から赤い液体が流れる。液体はあの人の拳に伝い、袖口に染みを作る。

「穢らわしいガキめ」

「くっ……」

腹上で膝を立てられたことで、ぐりぐりと腹の中に強い圧迫感が生じ呼吸が乱れる。息も満足に出来ないあたしをこの人はさらに追い打ちをかける。休む時間なんて一切与えられないわけがない。髪の毛先を力づくに引つ張られ頭皮は悲鳴を上げ、口の中の鉄の味と相まって、流したくない涙が勝手に流れてしまう。それでもこの人は涙なんて目もくれず、ただひたすら力任せに罵り、罵り、蔑み、声を荒げ、家の中は汚い言葉で満たされてしまう。髪を引つ張られたことにより、この人との距離が少し近くなった。居間から入ってくる光が逆光となって表情が見えなかったが、ようやくこの人の顔色が薄い光の中露わになる。露わになった表情は、目尻が上がり目は鋭く尖り大きく口を開けた鬼のようだったが一瞬だけ、——ひどく悲しそうな目であたしを見ていた。

「人様の顔をじろじろ見てるんじゃねえ！気持ち悪い」

そう吐き捨てると、再び今度は頭上から拳が下ろされる。またしても鈍い音が小さく響く。気持ち悪い程に頭が揺さぶられ、視界がだんだんとぼやけていくなか、ようやく飽きたのかあたしを罵る手がびたりと止まった。

今まで思わず耳を塞ぎたくなるような音ばかりしていたため気づくことが出来なかった。しかし、いざ静まってみればどうやら二階の方で微かであるが物音がしている。

——お母さんだ。

その音が妻によるものだとこの人もわかったのだらう、少しほっとするあたしに舌打ちを鳴らし、力強く突き放した。依然として体は痛い、気が済んだのであろうこの人はあたしなんていなかったかのよう階段を上り、部屋へ戻っていった。電気は点けっぱなしだった。

地獄物語 「彼方の世界で知る」

第一章 「中道」

痛いとか、熱いとか、そういう風を感じ取っていたのはもう何年前の話だろう。今となつては流れ作業のように見えてしまう時もある。もちろん痛みを感じないわけではない。そういう体になればどれだけ楽になれるだろうか。痛みを感じない体になれば、毎日やって来る『夜』に怯えなくなるのだろうか。だがしかし、いくら流れ作業のように見えるとは言え、体は確実に痛みを認識している。そしてそれは、痣や固まる血を通してあたしを恐怖へ誘ってくる。

幼い頃はどの家もこういった躰をされているのだとずっと思っていた。しかし、学校で学んだことがあつているならば、どうやらこれは「虐待」と言うものらしい。虐待は立派な犯罪らしいが、あたしが学校のパソコンで見た情報だとご飯を与えてもらえなかったり、お風呂に入らせてもらえなかったりするのだと言う。だが、あたしの場合にご飯もお風呂も与えてもらつている。暴力を振るわれているだけでも虐待と呼ぶらしいが、近い親戚もいないし、ましてや友達なんているはずがないあたしには相談することも出来ず、自分が虐待に遭つていることを外に知らず術がない。だけど、あたしはどのみち知らせようとは思っていない。あたしはお風呂も食事も与えられている。パソコンで見た話は、あたしが受けているものよりも遙かに悲惨なものだった。最悪のケースは死亡もあった。あたしなんかより、そういった人が助けられるべきだ。と、言うのは言い訳だ。実際家の外に虐待が知らされてしまうと、今よりひどい暴力を振るわれるのではないか、お風呂や食事までもが奪われてしまうのではないか。そういう恐怖があたしを支配してくる。そして、あ

たしは本当に悪い子なのだと思います。そうやって今まで耐えてきた。そして、今日もあの人は帰ってくる。『夜』の始まりだ。

あたしの部屋は二階にあるが、玄関のドアを開ける音はここまで聞こえてくる。きつとまずはご飯を食べるはずだから、上には上がってこないはず。部屋から出なければ時間は稼げる。だが、突然襲ってくる尿意。そういえば少し前に水を飲んでいたのであった。しまったと、舌打ちしてもう後の祭りだ。我慢しているが、どんどんせり上げてくるじれたい感覚は容赦なくあたしを攻め立てる。そして限界がきた。その尿意にあたしは勝てなかった。布団をめくり、ベッドから極力音を立てないように出る。必要最低限の物しか置いていない部屋の扉に耳をあて、澄ませる。特に音はしていない。これまた音をたてないように解錠し、慎重にドアノブを回して扉を押す。右奥の部屋に明かりはない。踊り場の電気を点けずに手さぐりで前へ進む。もちろん細心の注意を払って、音は立てないように慎重に動く。だんだんと目が暗闇に慣れてきた時、右足を前に出すとそこに足場はなかった。階段だ。一度右足を引っ込め、小さく息を整える。

——まだ、我慢できる。だけど時間はない。

トイレは階段を下りてすぐ左だ。息を飲みこみ、右足を再び踏み出す。薄らとしか見えない視界に不安は募る。一段ずつ音を殺して下りていくと、少しずつ明かりが見えてきた。あの人はやはりリビングにいるようだ。最後の一段を下り終わった時、安堵から息を零しそうになりかけたのを必死で飲み込む。目の前のガラス戸からは部屋を照らす電気やテレビの音が漏れている。今まで以上に気を引き締め、左手にあるトイレのノブを握る。そして、静かに回し一気に駆け込む。電気は点け忘れた。

美間 香織

(西村ゼミ)